Catalog 2020-#4

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

(Catalog 2020-#4 紙版使用表紙ジャケット)WILDERNESS YET/Wilderness Yet(England, Ireland)

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
ただしＬＰを含む場合は一律５００円。
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）
ＬＰを含む場合は＋２５０円。

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ１０/１までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（依然新型コロナウイルス禍の通販カタログ）
*梅雨の長雨と豪雨の後は猛暑の夏、そして台風。幸いに豪雨も台風も被害はありませんでした。それにしても今年の暑さは尋常ではありませんでしたね。皆さん熱中症は大丈夫でしたか？いつもは扇風機のみでしのげるのですが、今年は数日、エアコンのある部屋（ハープ教室）のエアコンを付けて、ドアーを開けたままにして、居間に冷気が入るようにして、暑さをしのぎました。
*外国からの郵便物は相変わらず時間がかかっていて、発注して待つ身も、気長に待つ気分が当たり前になってきました。アイルランドからは日本向け郵便は相変わらず停止状態で、今回新入荷したアイルランドの CD は、郵便局が誤って受け付けたもの{発送主は「紛失するかも」と言っていましたが、ひと月半かかって届きました}や他国から仕入れた CD です。
*コロナ禍だからこそ生まれた素晴らしい CD があります。FAIRPORT の CHRIS LESLIE の新作と米国の女性シンガー&ギタリストの MOLLY TUTTLE の新作。二枚とも、二人が「ステイホーム」を余儀なくされた状況下で、前向きに考えた結果誕生した心からの新作です。KATE

RUSBY のトラッドではない新作は、結果的に「ステイホーム」的な音楽になっていて、ロックダウン･アルバムとして宣伝されています。
*ここでは取り上げませんが、今回の新入荷分も気長に待って手元に届いた愛おしい CD ばかりです。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は 11 月 10 日まででＯＫです。
ＯＫです。

＊ＴＯＰ　３０　ＳＥＬＬＥＲＳ((2020－＃3))＊
1)ÉILIS KENNEDY:So Ends This Day(Ireland)
2)JACQUI McSHEE & KEVIN DEMPSEY
　:From There To Here(England)
3)JUNE TABOR & OYSTERBAND:Fire & Feet(England)
4)PETER KNIGHT'S GIGSPANNER BIG BAND
　:Natural Invention(England)
5)AVOCET:Lend Your Garden(England)
6)THE WEIGHT BAND:Live Is A Carnival(USA)
7)SIAN:Sian(Scotland)
8)FINDLEY NAPIER & GILLIAN FRAME WITH MIKE VASS
　:The Ledger(Scotland)
9)FAIRPORT CONVENTION
　:What We Did On Our Saturday(England)
10)FAIRPORT CONVENTION:Shuffle and Go(England)
11)EILEEN ROSE:Muscle Shoals(USA)
12)MICHAEL AND SHAY BLACK:Glackanacker(Ireland)
13)NED ROBERTS:Dream Sweetheart(UK)
14)WESTERN CENTURIES:Call The Captain(USA)
15)LETITIA VAN SANT:Circadian(USA)
16)KEN WHITELEY:Calm In The Eye Of The Storm(Canada)
17)MARIA KALANIEMI & EERO GRUNDSTROM:Mielo(Finland)
18)LYNNE HANSON:Just Words(Canada)
19)SALT HOUSE:Huam(Scotland)
20)DANTCHEV:DOMAIN:Say It(Finland,Bulgaria)
21)HILARY DE VRIES:雨のち桜(Scotland)
22)NOBLE JACKS:Stay Awake(UK)
23)ADAM AMOS & NOEL ROCKS:Back Up To Zero(Scotland)
24)JOHN STEWART:Old Forgotten Altars(USA)
25)NEVER TIRE OF THE ROAD／旅に倦むことなし
　～アンディ・アーヴァインうたの世界(Ireland)
26)YANN-FANCH KEMENER:Roudennou/Traces(Bretagne)
27)MATTHEWS SOUTHERN COMFORT:The New Mine(UK)
28)ROSIE CARSON & KEVIN DEMPSEY:Nightbirds(England)
29)JOHN DOYLE:The Path Of Stones(Ireland)
30)JACKIE OATES & JOHN SPIERS
　:Needle Pin,Needle Pin(England)
※前回新入荷 CD が少なめだったせいか、前回販売数が１～３位にランクした CD は、予想を上回る方からのご注文がありました。最も売

れたÉILIS KENNEDY:So Ends This Day は、この 10 年で最も売れた CD になりました。アイルランド→日本の郵便が停止しているため、運賃が少々高くても、思い切って国際宅急便で仕入れた甲斐がありました。

Book, Guitar, Re-issue, USA, Canada, British Folk, England

Scotland, Ireland, USA(Trad), Canada(Trad), Europe 他, あとがき

（ジャケ写掲載分が初入荷と初コメント商品です）

［ＢＯＯＫ］

（国内版）

*NEVER TIRE OF THE ROAD／旅に倦むことなし
　～アンディ・アーヴァインうたの世界　¥1600
（翻訳家で文芸誌「MONKEY」編集長の柴田元幸氏の対訳による Andy Irvine の歌詞集。収録歌詞は Andy がコンサートで好んでうたうレパートリーの中から 21 曲。歌詞集に加え、Andy からの「日本のみんさんへ」の挨拶、ディスコグラフィー、バイオグラフィー、Andy の親友で画家の Eamonn O'Doherty による挿画 6 点など全 120 ページ。2020 年ヒマール刊）

*堀田はりい(船津潔):東遊伝～鷹王と八百万の神々　¥2200
（大長編歴史ファンタジー小説。「ケルトからモンゴル、三国時代の韓半島、そして筑紫国へと、遙かなる草原の道を辿る精神の旅。ケルトの竪琴から巫楽に龍神を招来する歌舞音曲。〝金〟という永遠の命が繋ぐ神々との交流。力士の持つ邪破の力を縦糸に、ニール・ヤングやジョン・レノンまで現れる言霊の世界。世界の音楽好きには堪られない、これぞ東遊伝」星川京児。2012 年梓書院刊）

*堀田はりい
　:神宿る沖ノ島―古代日本人が見えてくる　¥1800
（沖ノ島祭祀遺跡の謎が解き明かされた究極の一冊がここに完成！右文書院ＨＰより。どんな祭りが行われていたのか、なぜ女人禁制になったのか、舶載品はどんなルートでもたらされたのか、すべての謎が解き明かされる。読後、古代の見え方が変わるでしょう。2018 年右文書院刊）

*堀田はりい
　:古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた　¥1800
（126 代続く古代天皇の謎に迫る 1 冊。祭祀から読み解く古代日本の正しい歴史を知り、卑弥呼や邪馬台国を知ろう!祭祀から読み解く古代日本の正しい歴史。纏向も卑弥呼も邪馬台国も全面解決。2019 年右文書院刊）

（海外版）

*BRINGING IT ALL BACK HOME　¥3980
（在庫一冊。Nuala O'Connor 著。P176。1991 年刊。BBC）

*THE LIFE AND MUSIC OF STAN ROGERS　¥2980
（在庫一冊。Chris Gudgeon 著。ハードカバーの表紙に十カ所ほど尖ったもので突いたような痕跡が見られます。P217。1993 年刊。

Penguin Books Canada)

*DAZZLING STRANGER "Bert Jansch And The British Folk And Blues Revival" ¥2980

(在庫一冊。by Colin Harper。P376。2000刊。Helter Skeler)

（楽譜,ソングブック等）

*THE COLLECTED COMPOSITION OF ED REAVY ¥2980

(Compiled byJoseph M.Reavy。多くのアイリッシュ演奏家に愛されている伝説的フィドル奏者Ed Reavy{1898-1988}作曲の楽譜集。全127曲。曲目解説付。。P152。Green Grass Music)

（ＣＤ楽譜）

*CHARIE LENNON:Irish Tunes For Fiddle ¥2980

("Musical Memories Vol 2"。Charlie Lennonの72曲収録のCD付き楽譜。曲目解説、ディスコグラフィー他付。P106。2012年刊。Waltons)

[CD/GUITAR他]

(Piccard&Masure)

*PICCARD & MASURE:Webbesnaren 2.0 B

(Orion,Laïs,Ambrozijn,Comas,Helen Flaherty Bandのギター＆ヴォーカルで活躍してきたPhilip Masure{ｷﾞﾀｰ､ｼﾀｰﾝ､ﾊﾞｳﾛﾝ､ﾀﾞﾗﾌﾞｯｶ､ｳﾞｫｰｶﾙ}とマウンテン･ダルシマー系民族楽器"ホメル"の演奏家のGuido Piccard{ﾎﾒﾙ､ｼﾀｰﾝ､ｷﾞﾀｰ､ﾊﾞﾘﾄﾝ･ｳｸﾚﾚ}のデュオ･アルバム。これはこれは･･･。Philip Masureがケルト系バンドの一員から離れ、ギター系楽器の演奏家のGuido Piccardとのコラボで創り上げたギター系音楽のマジカルなこと！ケルティック･リズムをベースに西欧トラッドに東欧音楽やジプシー･ジャズまで幅広い範囲の音楽を細やかさと彩りを極めた演奏で、美しく奏で上げた耳に新鮮な音楽。ギター音楽ファンならずとも、二人の職人芸的演奏とユーロ･トラッド的美的センス溢れる音楽に心奪われること必至。ファンタスティック！Tony McManusのギターと聴き較べるのも面白い。ゲスト:Soetkin Collier{相変わらず麗しいシンギング！},David Munnelly,Sylvain Barou。2020作。Appel)

*ROBERT DOYLE:Life In Shadows A

(ダブリンのフィンガー･スタイルのギター奏者でシンガーのR.Doyleのソロ。Pierre Bensusanの門下生という彼のギターの弾き語りは一種独特の世界を創作。Bert&Johnをモデルとする彼独特な、深いところでアイリッシュ･スピリットがみなぎるフォーク･ミュージックの世界を生み出している。2011作。Robert Doyle Music)

[リイシュー/Historic Recording]

（LP/Ｕ．Ｓ．Ａ．）

*SHIRLEY COLLINS:The Ballad Of Shirley Collins　　¥2990
（限定カラー{桃色}LP 盤。Shirley Collins のドキュメンタリー映画から音楽を寄せ集めた 21 トラック収録の編集盤。米国フォーク～ルーツ音楽の素晴らしきドキュメント。2018 作。Earth）

（CD/Ｕ．Ｓ．Ａ．）

(David Blue)

*DAVID BLUE:These 23 Days In September＋Stories＋
Nice Baby & The Angel＋Cupid's Arrow　　¥2590
（David Blue の 1968 年と 1971 年{以上 Disc１}、1973 年と 1976 年{以上 Disc２}の四枚の二枚組。BGM で久し振りに四枚聴いたが、西海岸ロック調の"Nice Baby &..."は文句なしに好みだが、やはりうたうことに徹した"Stories"は奇跡の名盤。四枚通して聴くと、彼の音楽性の変遷がつぶさに分かる。2020 作。Morello）

*JOHN STEWART:Old Forgotten Altars　　A
（副題"The 1960s Demos。本作は 1965 年～1968 年に Columas Recording スタジオで録音されたデモ音源曲 18 曲に 1959 年の宅録曲一曲を加えた 19 曲収録盤。個人的には 1972 年の"Sunstorm"で J.Stewart に出逢って、その後に彼の前のアルバムを買い集めたが、ソロ以前の Kingston Trio のフォークには興味は持たなかった。本作はその Kingston Trio 時代に録音した主に弾き語りによるフォークで、1969 年の"California Bloodlines"のソロのアルバムのデモ録音、或いはソロデビュー前の予行演習的な位置付けが出来る内容。"California Bloodlines"に収録されていて、今も好きな曲が三曲収録されている。その三曲は"The Pirates Of Stone County Road"と"She Believes In Me"と"Mother Country"。前の二曲は奥さんの Buffy Ford Stewart とのデュエットで、1974 年のライヴ盤"The Phoenix Concerts"にも収録されている"The Pirates･･･"はそのライヴの感動を思い起こさせる歌唱にうっとり。"Mother Country"は彼らしい気骨あるギター弾き語りフォークに心熱くなる。2020 作。Omnivore）

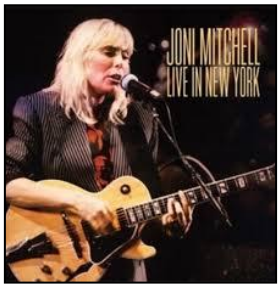
*BOB MARTIN:Midwest Farm Disaster　　C
（1970 年代 SSW アルバムの名盤中の名盤。1972 年/2007 作。Riversong。検品してお送りします）

*JOHN PRINE:The BBC Sessions
～The Lost Broadcasts 1971-1973　　A
（1971 年 BBC2 のテレビ番組のライヴ音源から６曲と 1973 年 BBC の FM ラジオのライヴ音源から８曲の全 14 曲。大半の曲が John Prine の 1971 年のデビュー･アルバムからのナムバーで、ギターの弾き語りでうたわれる曲の数々は、素朴でデビュー当初の彼の唄本来のスッピン魅力が楽しめる。1971 年/1973 年/2019 作。Sutra）

（CD/Ｕ．Ｓ．Ａ．{国内盤}）（検品してお送りします）

*DON NIX:In God We Trust(Vivid)　¥2800
*JIM PULTE:Out The Window＋Shimmy She Roll,Shimmy She Shake(一枚目と二枚目の 2in1。Vivid)　¥2800
*FRED NEIL:Bleecker & Macdougal(Warner)　¥2800

（CD/ＣＡＮＡＤＡ）



(Joni Mitchell)

*JONI MITCHELL:Live In New York　B
(1979 年、"Mingus"を発表した年の Joni Mitchell のライヴ二枚組。全 21 曲。バンド・メムバーは Pat Metheney{ｷﾞﾀｰ}、Michael Brecker{ｻｯｸｽ},Lyle Mays{ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ},Jaco Pastorius{ﾍﾞｰｽ、ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}。ジャズに傾斜していた時代の Joni のライヴだが、ヴィヴィッドなジャズ・サウンドの波に乗って自在にうたう Joni の唄の輝きに驚かされる。この時代、自身の多感な唄を表現しきるのにベストのサウンドは、フォークやロックではなく、ジャズ、それも都会的な。本作は類い稀な SSW の Joni Mitchell の一つの到達点的ライヴ。ジャズ・サウンドで聴く"Woodstock"は夢か幻かのように聞こえる。2020 作。Equinox)
*BRUCE COCKBURN:Inner City Front　A
(True North 盤が入手しづらい頃に販売していた米国 ESD 盤。1981 作。検品してお送りします)

（LP/ＢＲＩＴＩＳＨ　ＦＯＬＫ）
*BERT JANSCH:Moonshine　¥2690
(名盤中の名盤。LP 盤。1973 年作。1973 年/2015 作。Earth)
*BERT JANSCH:L.A. Turnaround　¥2690
(名盤中の名盤。1000 枚限定カラー{青}LP 盤。アルバム未収録曲４曲を追加収録したダウンロード・コード付。1974 年作。1974 年/2018 作。Earth)

（CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他）

(Dave Cousins)

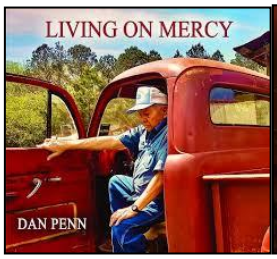
*DAVE COUSINS:Boy In The Sailor Suit
～Expanded & Remastered Edition　B

(Dave Cousins の 2007 年の名盤"Boys In The Sail Suit"に 2008 年と 2009 年のライヴ音源から二曲を追加して発売されたボーナス曲付再発リマスター盤。バンド・メムバーは Miller Anderson{ｷﾞﾀｰ。Spencer Davis Group}、Ian Cutler{ﾌｨﾄﾞﾙ。Albion Morris}、Chas Cronk{ﾍﾞｰｽ。Strawbs}、Chris Hunt{ﾄﾞﾗﾑｽ。Meal Ticket}。彼のソロ・アルバムはどのアルバムもそうだが、彼の英国の香りに満ちたヴォーカルと英国の香り放つフォーク～フォーク・ロックは、今聴いても凄い魅力。ボーナス曲の二曲のライヴ曲は、一曲目は Fairport のビックリの!?圧巻の英国フォーク・ロックだし、二曲目はブルージーでタイトなフォーク・ロックで、二曲ともに圧巻。2007/2008/2009 年。2020 作。Esoteric)

*STRAWBS:Preserves Uncanned D

(1991 年作。二枚組 CD。Road Goes On Forever)

[CD/ＵＳＡ{Folk、Rock}系]



(Dan Penn) (Dirk Powell) (Golden Shoals) (Robert Jon & The Wreck)

*DAN PENN:Living On Mercyn B

(直前入荷。発売時 78 歳の Dan Penn の新作。スタジオ録音盤としては"Junk Yard Junky"以来の 12 年振りの新作。録音はナッシュビルとアラバマのシェフィールド。バックを務めるスタメンは、マッスルショールズの Clayton Ivey,Michael Rhodes,Milton Sledge,Will McFarlane の面々に加えて、バックグラウンド・シンガー達にホーン・セクション。この布陣は正にスワンプ・サウンドを志向する布陣。好きな心地よく安心できるサウンドの中、Dan Penn 翁のヴォーカルは悠々として穏やか。Dan Penn のヴォーカルもバックのスワンプ・サウンドもふくよか。厚紙の CD 袋にポンコツ車の写真に"Rust In Peace"の文字。"Rest In Peace"{安らかに眠れ}をもじった言葉でしょうが、Rust は Dan 本人で、安らかな気持ちを表現した言葉と解釈。聴き手もすっかりピースフルな気持ちなってしまう。盤は LP のデザイン。2020 作。Last Music)

*DIRK POWELL:When I Wait For You A

(何ですか！これは！Donald Show を共同プロデューサーに迎え、スコットランドとルイジアナで収録された本作の米国 SSW のアルバムとして、最高にいぶし銀な味わい。共演者は John McCusker,Michael McGoldrick,James Mackintosh,Ameria Powell{ヴォーカル},Sophie Powell{ヴォーカル},Rhinnon Giddens{ヴォーカル、ヴィオラ、バンジョー},Sara Watkins 他。このスコットランド組と米国組がお互いのルーツ音楽を保持したまま協力し、響き合わせて創り上げたミックス・サウンドの旨み、そして何より米国南部系音楽の酸いも甘いも知った Dirk Powell のヴォーカルの旨み、そう、Levon Helm{レイドバックした感じ}を想起させるヴォーカルの旨みは、格別中の格別。一曲一曲噛みしめるようにうたう Dirk の唄には哀愁も

漂う。そうそう四曲目"The Bright Light Of The Day"はかなり The Band の"The Weight"っぽい。奇跡一枚。2020 作。Vertical)

*GOLDEN SHOALS:Golden Shoals A

(Golden Shoals は Mark Kilianski{ﾎﾞｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ､ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}と Amy Alvey{ヴｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ､ｷﾞﾀｰ}の男女の二人組。二人はボストンのバークリー音楽大学卒業者で、ボストンの彼らの家のセッションから音楽活動を開始したという。二人が愛する音楽は米国のアパラチア音楽やオールドタイム･ミュージックや伝統的ブルーグラス等の白人系米国ルーツ音楽で、二人はそうした音楽のスタイルで、そうした音楽のルーツの味わいたっぷりにオリジナルなフォークを創作する。どのナムバーもオールドタイムな匂いと味わいバッチリ。逆に彼らの活気ある演唱は、そうした古臭い音楽が持つ魅力と活力を教えてくれる。加えて、Mark のヴォーカルは Gram Parsons っぽい甘みがあって SSW としての魅力があるし、同様に Amy の涼やかなヴォーカルも SSW としての魅力がある。2020 作。Trade Root)

*ROBERT JON & THE WRECK:Last Light On The Highway A

(これは一体･･･。Robert Jon & The Wreck は、ヴォーカル＆ギターの Robert Jon Burrison が率いる五太郎の南部ロック･バンド。これは出来過ぎ。ツイン･ギターは Allman Brothers を思い起こさせ、Robert Jon のヴォーカルとバックグラウンド･ヴォーカルと彼らのロックは、南部ロックに加えて、西海岸ロック風でもあって、パワフル。 嘘みたいに凄くてかっこいいアメリカン･ロック。
Robert Jon 以外のメムバーは、Andrew Espantman{ﾄﾞﾗﾑｽ､ﾊﾞｯｸｸﾞﾗｳﾝﾄﾞ･ヴｫｰｶﾙ}, Steve Maggiora{ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ､ﾊﾞｯｸｸﾞﾗｳﾝﾄﾞ･ヴｫｰｶﾙ}, Henry James{ﾘｰﾄﾞ･ｷﾞﾀｰ}､Warren Murrel{ﾍﾞｰｽ}。2020 作。
Robert Jon Music)

*THE WEIGHT BAND:Live Is A Carnival A

(The Weight Band は The Band の Weider と Randy Ciarlante の二人を含む五人編成のウッドストックを拠点に活動するアメリカン･ロック･バンドで本作は二枚目。本作は 2019 年の一月にニューヨークの Brooklyn Bowl でのライヴ。アルバム･タイトルは The Band の名曲"Life Is A Carnival"をもじったタイトルだが、全 14 曲中 7 曲は｢南十字星｣までの The Band の名曲で、4 曲は Jim Weider と Levon Helm や Colin Linden 等との共作等。The Band 風ヴォーカルとハーモニーそして鋼のロック･サウンドは、痺れる。2020 作。
Must Have Music)

*ANDY WILKINSON:Deep In The Heart A

(テキサスの SSW の Andy Wilkinson の 1992 年作。久し振りに本作を聴いて｢この時代は良い SSW アルバムがいっぱいあったなあ｣と思うことしきり。Andy の唄は例えるなら、同じテキサスの Steve Fromholz 風で、肩肘はらない素朴で温厚な唄と Maines Brothers {プロデュースは Lloyd Maines}他による爽やかな土臭いサウンドが何とも心地よい。1992 作。Adobe。検品してお送りします)

*JOHN MCCUTCHEON:To Everyone In All The World B

(ヴェテラン･フォーク･シンガーの John Mccutcheon の通算 40 枚目。その昔、ぼくなどは彼のハンマーダルシマー･アルバムをこよなく愛聴した。本作は Pete Seeger 作のナムバーと P.Seeger のレパートリー全 15 曲を John が仲間達と演唱したもの。この企画に参加した仲間達は、固定メムバーの Pete Kennedy,JT Brown,Robert

"Jos" Josepe に加えて、Hot Rize, Beausoleil, Steels Wheels, Finest Find などのメムバーや Stuart Duncan, Corey Harris, Suzy Boguss, Katia Cardenal, John Jenning 等々。久々に聴く John の唄は穏やかで丸っこくて、今が旬！と感じられる生き生き感ある。2019 作。Appalseed)

*TERRY ALLEN & THE PANHANDLE MYSTERY BAND
:Just Like Moby Dick B
(Terry Allen の新作！長編小説「『白鯨』(Moby Dick)のように」と題された本作は、冒険心旺盛で様々な悲喜劇が T. Allen のアクのあるヴォーカルで朗々とうたわれる。やや円やかになった印象はあるものの、Terry のヴォーカルの野趣な覇気は変わっていない。Charlie Sexton, Jo Harvey Allen, Bukka Allen, Richard Bowden, Lloyd Maines 等のバックアップはいぶし銀のテックスメックス～テキサス・フォークとして味わいが深い。女性 SSW の Shannon McNally とのデュエットも聞き物。本作発売時、T. Allen は 76 歳。2020 作。Paradise Of Bachelors)

*MICHAEL DOUCET:Lâcher Prise A
(BeauSoleil の Michael Doucet の新作。ソロ名義だが、実質的に孫くらいの女性シンガーの Sarah Quintana{ヴォーカル、ギター}に Chad Viator{ギター}, Chris French{ベース}, Jim Kolacek{トランペス}をバンド・メムバーに迎えたフランス系のケイジャン、ザディコ等のルイジアナ・スタイルのルーツロック。ケイジャンやザディコをベースに滅茶苦茶ノリの良いルーツロックで驚かせる。2020 作。Compass)

*PARIS TEXAS:When You're Gone A
(Paris Texas を名乗るベルギーのアントワープの五太郎バンドによる本作は、米国音楽の酸いも甘いも知ったような味わいのあるご機嫌な米国フォーク・アルバム。SSW の Gerrit Hüppertz{ヴォーカル、ギター}と Dave Crokaerts{ヴォーカル、ギター}を中心に結成された Paris Texas の音楽は、70 年代、米国のフォーク・クラブで気の合うフォーク・シンガーとミュージシャンが集まって結成したようなあの時代の SSW の雰囲気と自由な空気感があって、滅茶苦茶和んでしまう音楽。タイムスリップして、シカゴかどこかのフォーク・クラブに迷い込んだような気分。愛すべき音楽。残りのメムバーは Dirk Peerear{ヴォーカル、トブロ}, Jan Michielsen{ヴォーカル、マンドリン}, 2019 作。TRAD)
Maarten Michielsen{ヴォーカル、タブルベース}

*DAVE SPECTER:Blues...From The Inside Out A
(Featuring Jorma Kaukonen{ギター} & Brother John Kattke{ヴォーカル、ピアノ、オルガン}の 35 年のキャリアを誇るブルース・ギタリストの Dave Specter のシンガー＆ギタリストとしてのデビュー作。ソリッドなブルース・ギターにドラムス、ベースにホーンが加わったブルース～南部ロックは 60 年代後半から 70 年代のブルース系音楽のコアの味わいとパワーを保持し、しかも Dave Specter のヴォーカルは 70 年代の南部系 SSW のようなヌーボーとした味わいを発散していて、何とも味わい深く魅力的。ゲスト・シンガーだが、シカゴを拠点に活動する女性 SSW の Sarah Marie Young のソウルフルな南部ロックは、だめ押し的に圧巻。2019 作。Delmark)

*JACK TEMPCHIN:One More Time With Feeling A
(穏やかに昔のことを懐かしむ"One Of Good Old Days"で幕開け

する Jack Tempchin の新作は続く Jack Tempchin 作で Eagles のヒット曲"Peaceful Easy Feeling"から若かりし頃にタイムスリップしたかのような年季が入ってやや懐古趣味ながら、輝き感のあるカントリーロックを自然体で体現していて、最高な気分になる。これはもう 70 年代の西海岸ロック＆ＳＳＷファンへの最高の贈り物。プロデュースは Uncle Jim's Music の Gary Nicholson。音楽シーンで同じ時代を過ごし、気心の知れた音友の手腕が大きく功を奏した感がある。2019 作。Mailboat)

*AD VANDERVEEN:Final Refuge A

(オランダのヴェテラン SSW の Ad の新作は、ギター、ピアノ、バンジョー、スティールギター、ハーモニカ等によるサウンドは木漏れ日感があって、齢を重ねて到達したかのような落ち葉ふかふかの穏やかな唄たちだ。その穏やかな唄たちは、フレッシュなアコースティック･サウンドの輝きの中で、実に味わい深く、どちらかと言うと渋いタイプの唄なのに、夢見心地な趣がある。出来過ぎなくらい凄く良く出来た SSW アルバムだ。時折聴くことの出来る Ad と Kersten De Ligny のハーモニーが夢見心地さを増す。2019 作。Continental)

*DAVID MASSENGILL:Coming Up For Air A

(David Massengill を知ったのは Jack Hardy が編集した Fast Folk Musical Magazine というマガジン付 LP。D.Massengill は Jack Hardy が亡くなるまで Folk Brothers という二人組で活動したが、本作は彼の 1992 年のデビュー･アルバム。Steve Goodman タイプの SSW だが、ニューヨークではもう既に中堅の SSW 的存在で、機知に富んだ唄は溌剌として新鮮。w.Steve Addabbo{プロデューサーでもある},Larry Cambell,Chris Bishop,Denny McDermott, etc。1992 作。Flying Fish。本 CD は昔米国盤 CD で一時期流行った縦長のプラスティック製パッケージ仕様ですので、解体し、通常 CD 仕様にてお送りします)

*MARK ERELLI:Hillbilly Pigrim A

(SSW の M.Erelli の 2005 作。本作はエヴァリーブラザーズのようなスウィートなカントリーからスウィンギーなカントリーまで古き良き米国音楽の世界へタイムスリップ。Mark のカントリー風音楽は懐古趣味を超えて、米国音楽として不思議と新鮮。ゲスト:Erin McKeown。2005 作。Signature。検品してお送りします)

[CD/ＵＳＡ{female}他]

(Molly Tuttle) (Mary Chapin Carpenter) (Jan James) (Emma Swift)

*MOLLY TUTTLE:But I'd Rather Be With You A

(若手注目の女性 SSW でチャンピオン･ギタリストの Molly Tuttle の新作で二枚目のアルバム。新型コロナ禍で「ステイホーム」を余儀なくされ、「私自身なぜ音楽を愛するの？」と自問をした結果誕生したのが本作。何と収録曲全 12 曲カバー曲。Rolling Stones の

"She's A Rainbow"やKaren Daltonの唄{名盤"In My Own Time"収録}で痺れて、ようやく今自分流に消化できるようになったというDino Valenti作"Something On Your Mind"やGrateful Deadの"Standing On The Moon"{なぜか70年代のブリティッシュ・フォークの匂い}等、Molly自身の思い出のナムバーを澄んだ心でうたっている。三つ折りデジパックを開くと、各曲、その唄との出逢ったときのことが綴られている。録音は小さな共同生活空間、そして四、五人のバンド編成。音楽はルーツロック・スタイル。自身のギターもベースもドラムスもキーボードもスティール・ギターも、そしてMollyのヴォーカルも生のエネルギーとぬくもりに加えて、夢心地感が感じられるもので、心と体にメッチャ美味しいサウンド。ラストはCat Stevensの名曲"How Can I Tell You"。自身の鮮やかなアコースティック・ギターをお伴にしたMollyの限りなく優しい唄は、聴き終えたのちも心に残る。この曲は愛犬が死んだとき丸一日か二日、泣きじゃくって何度も何度も聴いたという。音楽は思い出を甦らせる力がある。2020作。Compass)

*MARY CHAPIN CARPENTER:The Dirt And The Stars A

(Mary Chapin Carpenterの新作で、通算15枚目。英国のピーター・ガブリエルのReal Worldスタジオでのライヴ録音。微妙にヴィブラートのかかったMaryのヴォーカル、そして悲しみも喜びも押し殺して淡々とうたう風なMaryの穏やかな唄たちは、本作でも不変。この淡々さが、アコースティック・ギターやピアノをフィーチャーした美しいサウンドやミディアムテムポのルーツロック調のゆるく抑揚のあるサウンドと相まって、彼女の滋味豊かな唄の味わいを増し、深める。ラスト曲でタイトル曲とも言える"Between The Dirt And The Stars"は7分34秒にも及ぶ曲で、終盤のみだが、彼女の唄としては珍しく、泣きのエレキギターが入って幕とじる。全てが天下一品。2020作。Lambent Light)

*JAN JAMES:Justify A

(ミシガン育ちで、現在シカゴを拠点に活動する女性SSWのJan Jamesの大砲級のブルース～南部ロック・アルバム。聖歌隊で鍛えたというソウルフルなヴォーカルは、あのJanis Joplinと比較されるほどだが、Janはブルースやゴスペルのシンガーとして感情移入がストレートで、エレキギター、ベース、ドラムス、キーボード、ラップスティール、女性バッキング・ヴォーカルなどによるロックもストレートにブルース～南部ロックを叩き出していて、その旨みは深い。同じ志を持ってシカゴに来たという曲作りのパートナーでギタリストのCraig Calvertのエレキギターはメチャかっこいい。それにしても、Janの歌唱力は凄い。2020作。
Blue Palace)

*EMMA SWIFT:Blonde On The Tracks A

(ナッシュビルを拠点に活動するオーストラリア人女性SSWのEmma Swiftのディラン・ソング集。"Highway 61 Revisited","Blonde On Blonde"{二曲},"New Morning","Planet Waves","Blood On The Tracks"{二曲}そして2020年作の"Rough And Rowdy Ways"等のアルバム収録曲。プロデュースはWilcoのプロデューサーのPatrick Sansoneで収録はナッシュビル。このEammaがうたうディラン・ソングはまた趣が違う。唄のメロディーはシンプルなのだが、内面的な情感が豊かに感じられる唄で、まるで彼女のオリジナル・ソングのように唄の味わいを深めている。Patrick Sansone

{ｷﾞﾀｰ､ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ他}､Robyn Hitchcock{ｷﾞﾀｰ}､Thayer Serrano{ﾍﾟﾀﾞﾙ･ｽﾃｨｰﾙ}､Jon Estes{ﾍﾞｰｽ}､Jon Radford{ﾄﾞﾗﾑｽ}等によるバックの音楽は､レイドバック･ムードのフォーク･ロックで､Emmaのロマンティック＆ノスタルジック･ムードの唄とピッタリ合っている｡2020 作｡Continental Song City)

*EILEEN ROSE:Muscle Shoals A

(ボストン出身の女性 SSW の Eileen があこがれのマッスルショールズ･スタジオで録音したダブルアルバムの"2 in 1"｡全 17 曲中 9 曲収録の A サイドは新曲で 8 曲収録の B サイドはマッスルショールズ再録曲｡音に魂が入っているというか､音が重厚で南部寄りのルーツロックとして見事に熟れたロックを結実させていて､主役の Eileen 姫はまるでフォーク､ロック､ソウルの偉大なシンガーの霊が乗り移ったかのように､堂々たるヴォーカルでうたい放つ｡2020 作｡Continental Song City)

*HANNAH ROSE PLATT:Letters Under Floorboards A

(Neil Young や Martha Wainwright の影響を受けたという女性 SSW の Hannah の新作で二枚目｡パンチ力あるルーツロック･サウンドでノリノリのヴォーカルで幕開けし､一発でノックアウトさせられる本作だが､Emmylou Harris に似た魅力的な声とストーリーをじっくりとうたう力は並はずれて素晴らしく､ルーツロックな音作りも基本は Hannah のギターの弾き語りをベースにしたもので､ルーツロックの質が高い｡そういう意味ではプロデューサーでギタリストの Thomas Collison の手腕は見事｡ゲスト:Sid Griffin｡2019 作｡Continental)

*CAROLINE HERRING:Verses A

(テキサスはオースティンを拠点に活動するヴェテラン女性 SSW でフォーク･シンガーの Caroline Herring の新作で八枚目｡古典的な聖歌やゴスペルの詩歌に影響を受けたという Caroline の唄は､個人目線の一般的な米国フォークとは趣を異にし､ひと言で言えば､柔和で瑞々しい包容力のあるフォーク｡Caroline の唄には春の草花や春の日射しのようなフレッシュな輝きがあり､ギターやピアノなどの演奏も同様な輝きがある｡唄は Allison Krauss の自宅スタジオで三日間で収録したそうだ｡小鳥の囀りが音楽と共に聞こえてきそうな音楽の空気感｡2019 作｡Continental)

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]

(Lynn Miles)

(Kathleen Edwards)

*LYNN MILES:We'll Look For Stars A

(16 枚目のソロ･アルバムという Lynn Miles の新作｡一曲目のピアノの弾きによるロマンティックなアルバム･タイトル曲そして二曲目の美しい高弦ギターの音色が印象的な夢心地な"The Saddest Song I Ever Wrote"そして三曲目の Greg Leisz のワイゼンボーン･ギターがメチャかっこいいカントリー･ロック調の軽やかな

"A Heart Can Only Take So Much"と昔初めて出逢った頃に感じた詩情豊かなLynn Miles節とその唄の世界は、本作も健在。加えて本作の魅力はプロデューサーのDave Dravesの手腕だろう。スティール・ギターを含めたGreg Leiszの各種ギターの多彩なギター・サウンドがLynnのロマンティックな唄に彩りを添えている。ラストを飾るタイトル曲と肩を並べるほど美しい"Because We Love"でのGreg Leiszの技巧的ギターの不思議感は独特。聴き終えて、長い唄の旅をした気分。2020作。Must Have Music)

*KATHLEEN EDWARDS:Total Freedom B

(ｶﾅﾀﾞの女性SSWのKathleen Edwardsの実に八年振りの新作。彼女はミュージック・ビジネスと決別し、オンタリオの小さな町でコーヒー・ショップを開店したという。長年の音楽パートナーでギタリストのJim Brysonとグラミー賞受賞プロデューサーのIan Fitchukをプロデューサーに迎えて、カナダとナッシュビルで録音された本作は、時は経っても、彼女らしい爽やかなルーツロックというかアメリカーナ。その爽やかさの源は、Jim Brysonの光沢感のある多彩なギター。Kathleenの詩的で風のように流れる唄にJimのギターはとても似合っている。カナダの長い冬をうたにした"Birds On A Feeder"にほっこりし、彼女が見つけた犬をうたにした"Who Rescued Who"に気分晴れ晴れする。待った甲斐のある爽やかな快作。2020作。Dualtone)

*LYNNE HANSON:Just Words A

(Lynn MilesとThe LYNNeSの女性デュオを組んで活動しているLynne Hansonの本作は、米国のヴェテラン女性SSWの風格と味わい。軽快なロック調から南部ロック調まで広くアメリカン・ロック調だが、腰の据わったヴォーカルはそんな音楽性を超えて、心に響く。Lynneのヴォーカルもアメリカっぽいサウンドも、カナダ人らしい知性が感じられて、つぼを得たロックは一体感と同時に心地よい爽快感がある。ブルース・ギターを含め滅茶苦茶かっこいいロック・ギターを弾くKevin Brettのギターにも注目。ゲスト:Catherine McLellan。2020作。Continental Song City)

*KEN WHITELEY:Calm In The Eye Of The Storm B

(1951年生まれのK.Whiteleyの新作。彼の南部音楽志向はChris & Ken WhiteleyのWhiteley Brothersのデビュー時から不変。そんな南部音楽を糧にして自分の音楽を育んできたK.Whiteleyの本作は、彼の体にしみ込んだ音楽を優しい気持ちで、ラップスティールやマンドリンを奏でながら、女性バッキング・ヴォーカル等の助っ人を得て、ゴスペルやブルースの南部音楽の味わいを損なうことなく、ゆったりと演唱したもの。第一印象は一枚目から三枚目で魅せた初期Ry Cooder風音楽だが、年の功というか、音楽がふくよかで優しい。静かな名盤。2020作。Borealis)

*CAROL BRUCE:When I Grow Up B

(全く記憶に残っていなかったカナダの女性SSWのCarol Bruceの1996年のアルバム。ちょっとマジカルな響きのアコースティック・ギターの弾き語り{"Parade"という曲のギターの響きはNick Drakeっぽい}を中心にしたSSWアルバムで、感受性豊かなCarolの唄は初期Joni Mitchellのイメージと重なる。異なるのはCarolはカナダの自然や大地との一体感が感じられること。100パーセント、イメージとしてのカナダの女性SSWらしいアルバム。夢見る気分。1996作。Carol Bruce。検品してお送りします)

*SHE STOLE MY BEERS:Sparks Off The Guardrail C
(ヴァンクーバーの六人組アメリカン･ロック･バンドの SSMB の 1992 年の一作目。今頃になってこのバンドの素晴らしさを体感。当時､Little Feat のロックに心酔し､ライヴではオリジナルと The Band,Grateful Dead,Allman Brothers 等のレパートリーをこなしていたという彼らのロックは､見事に Grateful Dead っぽいが､Little Feat 風グルーヴもあったり､中には Grease Band っぽさもあったり。当時は彼らのロックの旨みを味わい損ねていた。1992 作。Spinner。検品してお送りします)
*BLUE RODEO:1000 Arms A
(1984 年結成のカナダのヴェテラン･カントリー･ロック･バンドの Blue Rodeo の本作は､西海岸カントリー･ロックの王道を突き進む信じられないほど爽快なカントリー･ロック。現在のメムバーは Greg Keelor{ヴォーカル､ギター}､Jim Cuddy{ヴォーカル､ギター}､Bazil{ベース}のオリジナル･メムバーに Glenn Milchem{ドラムス}､Michael Boguski{キーボード}､Colin Cripps{ギター､ヴォーカル}の六太郎。Poco と Byrds の美味しいとこを清々しく受け継いでいて､感涙。彼ら､音楽で青春してますね。2016 作。TeleSoul)
*BOB WISEMAN:Accidental Acquired Beliefs A
(カントリー･ロック･バンドの元 Blue Rodeo のキーボード＆ヴォーカルの Bob Wiseman の 1995 年のアルバム。音楽プロデューサー志向の実験的要素が多い多彩なロック。ゲスト:Daniel Lanois, Ron Sexsmith。WEA。検品してお送りします)
*FRED EAGLESMITH:Lipstick Lies Gasoline B
(13 曲中 9 曲で Willie P.Bennett がバックグラウンド･ヴォーカルとマンドリンで共演した Fred Eaglesmith の 1997 年の名盤。Willie P.Bennett 系統の土臭いルーツロックは今聴いても圧巻。Produced by Scott Merritt。ゲスト:Richard Bell。1997 作。Razor & Tie。検品してお送りします)
*RODNEY BROWN:Freedom In Me C
(開封新品。カナダの第二期 SSW との付き合いは Ian Tamblyn や Rodney Brown や Willie P.Bennett との出逢いから始まった。1977 作。WRC8-807)
*RODNEY BROWN:When The Bay Turns Blue C
(開封新品。二枚目。1980 作。North Track)

[CD/UK, IRELAND]

(Kate Rusby) (Sylvie Simmons) (Rory Butler)

*KATE RUSBY:Hand Me Down B
(Kate Rusby の新作は James Taylor や Ron Davies{Kinks}や Bob Marley 等などフォークやロックのナムバーのカバー･アルバム。本作は BBC2 ラジオ番組のリハーサル中に生まれたアルバムだそうで､｢ステイホーム｣向きのアルバムとしてより親近感が持て

るアルバムになっている。収録は自宅のスタジオでご主人の Damien O'Kane の各種ギター、バンジョー等による伴奏は卓越していて彩り豊かで、Kate のいつもよりリラックスしていてにこやかそうな唄をよりハッピーに彩っている。Kate 自身 Damien が奏でるサウンドに酔い、楽しみ、身を預けるようにうたっているように聞こえる。Damien のサウンド・クリエイターとしての手腕も見事。Bob Marley の"Three Little Birds"を含めて全曲英米の SSW 風に聞こえるし、どのナムバーも Kate 節なのが良い。レコーディングには Kate の二人の娘他家族がコーラスで参加している。聴き終わって心ほんわか。2020 作。Pure)

*SYLVIE SIMMONS:Blue On Blue A

(ロンドン生まれで現在カリフォルニアを拠点に活動している米英 SSW、米英ロックの著名音楽ジャーナリストで、遅咲きの SSW でウクレレ奏者の Sylvie Simmons の新作で二枚目。本作は本作の収録曲のうち 5 曲のファースト・テイクを収録した後、複雑骨折に見舞われ、左手が使えなくなり、新曲を数曲作曲し、本作を完成させたという。2014 年作の"Sylvie"は「女 Leonard Cohen」と評されて話題になったようだが、本作も「女 Leonard Cohen」の匂いが立ちこめている。Leonard Cohen 風であるだけでも、個性的なのだが、彼女の魅力はウクレレが伴奏楽器であること。NHK の BS で放送された「外出自粛の夜に～ウクレレでリレー音楽会～」は好きな番組で、ウクレレの和み効果に舌鼓を打ったが、低いキーでゆるくうたう彼女の唄はウクレレの和みの音色を伴って、夢心地な不思議に心地よい唄の世界が生み出されている。彼女の、詩を味わい酔うかのような唄は、長年数多くの唄を評論してきた彼女が行き着いた珠玉と思える唄の世界なのだろう。穏やかで深い夢の世界に誘われる気分。プロデュースは SSW の Howe Gelb。2020 作。Compass)

*RORY BUTLER:Window Shopping B

(スコットランドから素晴らしい若者 SSW がデビューした。聴きながら思い浮かべたのは、内面的に自由な音楽は John Martyn, Nick Drake{実際 Nick Drake、Jackson Browne のファンだそうだ}、そしてヴォーカルの雰囲気は Paul Brady。今を生きる若者 SSW の音楽と暗鬱とした中で浮遊するような深みのある 70 年代 SSW の音楽とは安易に較べられはしないが、彼らが個々に創り出した英国フォークの伝統{ギター・サウンドを含む}を栄養分にして、ギターを爪弾き自由自在に自分の唄をうたう。それぞれのナムバーは、めまぐるしく変化する身の回りで起こったことをあたかもウインドー・ショッピングするかのように切り取って、優しい口調で軽やかに自分の気持ちを素直に唄にしている。その素直な軽やかさとギターの多彩さが実に心地よい。w.Matt Ingram{ﾄﾞﾗﾑｽ},Tom Mason{ﾍﾞｰｽ},Euan Burton{ﾍﾞｰｽ},Nick Pini{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ}。ちなみに表ジャケットのユニークな絵{Bob Dylan の Self Portrait を思い出した}はスウェーデンを拠点に創作活動をしている Cameron Watt 氏の作品。ネットで検索すると彼の絵が鑑賞できますよ。2020 作。Vertical)

*NED ROBERTS:Dream Sweetheart B

(前作"Outside My Mind"から三年。1970 年代の陰りの感じられるあの時代の英国 SSW っぽいヴォーカルとサウンドに舌鼓を打った前作同様本作も変わらない「ヒューマン・ソング」に舌鼓。プロデ

ューサーも前作と同じ Luther Russell で録音もロス。Ned のギター の弾き語りベースだが、ほどよくロックもしていて、Ned の唄の内向きで心優しい唄と音楽は、1970 年代風のブリティッシュ・フォーク～ロックの良き香りをほのかに立てていて、胸キュン！2020 作。Aveline)

*NOBLE JACKS:Stay Awake(Deluxe) A

(Noble Jacks は英国のブライトンを拠点に活動する Will Page{リードヴォーカル、フィドル、マンドリン、アコースティックギター} と Matt Deveson{エレキギター、ヴォーカル} の二人組。ベースの Jack Hosgood とドラムスの Chris Hardwick で補強した音楽は、爽やかでめっちゃかっこいいルーツロック。この爽やかさの源を音感的に探れば、例えば Runrig タイプのヴォーカルの香りに似た気品というか気高いヴォーカルとロックする前向きさから来るものと直感。言い換えれば、西海岸ロック的な陽光射すロックと Runrig タイプのケルティックとがほどよくミックスしたような気分爽快になるロック。めっちゃ好み。収録曲はダブルアルバム分？の 14 曲。2020 作。Noble Ground)

*ADAM AMOS & NOEL ROCKS:Back Up To Zero A

(Welcome Back！と心で叫びたくなるエディンバラのフォーク・デュオの新作で通算三枚目。二十数年振りに発表した二人の新作は、二人が奏でるバンジョーとギターの伴奏で、齢を重ねた二人のふくよかな唄に心和む。この味わいは出せそうで、中々出せるものではない。バンジョーとギターの音色に乗って、ソロで、そしてハーモニーでゆるくうたわれる唄は、牧歌的でほのぼのと自分の人生を振り返るような心の安らぎ感がある。そうした唄がごく自然に気持ち良くうたわれているのが素晴らしい。人生色々あっただろうけど、今はハッピー気分な素敵なオヤジ音楽でにっこり。Heron や Ronnie Lane のファンは是非。w.David Paton{元 Pilot/ベース},Kenny Hutchinson{アコ、ピアノ},Su-a Lee{チェロ}。2020 作。Amos and Rocks)

*DEBORAH ROSE:The Shining Pathway B

(南ウエールズ出身の女性 SSW の Deborah Rose の新作。新鮮な響きのアコースティック・ギターを中心にピアノやヴァイオリンの伴奏を伴って聞こえてくる Deborah の唄は何かを祈るかのように穏やかで、時空を超えた深い味わいがある。彼女のヴォーカルは美しく澄んだヴォーカルの時もあれば、霧がかかったようなスモーキーなヴォーカルの時もあるが、唄の清らかさと悠々さで一貫している。各種楽器の伴奏は主に本作のプロデューサーの Ben Walsh によるものだが、Deborah の唄に寄り添った控えめながら独創性に富むサウンドが、Deborah の唄をリフレッシュしている。7 曲目"Nigel"というナムバーは家族付き合いをしているという Eva Cassidy の父親との共作。2020 作。Deborah Rose)

*PETER KIRTLEY:Peter Kirtley A

(元 Pentangle のギター＆ヴォーカルの P.Kirtley の 92 年のソロ。w.Bert Jansch,Liam Genockey,Kenny Cradock,Sally Barker, etc.ブルースやジャズの要素もあるフォーク・ロック。1992 作。Hypertension)

*NIGEL KENNEDY:Kafka a

(ヴィヴァルディの「四季」やジャズやジミヘンの作品をフィーチャーしたアルバムなどクラシック、ジャズ、ロック等ジャンルを超えたスーパー・ヴァイオリン奏者 Nigel Kennedy の 1996 作。自

分のライヴを「ギグ」と呼ぶ彼の音楽は、トラッドやロックのフィドラーのノリの音楽。あらゆるジャンルの音楽を包含するほど多彩な響きを奏で、緩急自在で超絶。共演者にはDanny Thompsonや Rory McFarlaneやカナダの女性SSWのJane Siberryも。20数年前の音楽なのに、今も輝いている。1996作。Canada EMI。検品してお送りします)

*ANY TROUBLE:Live At The Venue B

(お宝発掘。Christine Collisterとのデュオや Richard Thompson Band参加でも知られる Clive Gregsonが結成したパブ・ロック・バンドの Any Troubleの1981年のライヴ。Bruce Springsteen作の"Growing Up"以外の曲は全曲 Clive Gregson作。Elvis Costello風のパブ・ロックは清々しい。そして今日の Richard Thompsonのヴォーカルに似てると思うことしきり。1981年/1988作。Line)

*NAOMI BEDFORD:Tales From The Weeping Willow B

(Naomiはまるで英国の Emmylou Harris。今の Emmylouではなく、70年代の。Naomiの声の響きは白人系アメリカン・ルーツ音楽の故郷のような響きなのだが、土臭さよりはむしろ優美さや夢見心地感が感じられるもの。鮮やかなアコースティック・ギターの伴奏を中心にしたサウンドも新鮮。2011作。Dusty Willow)

*MIKE HANRAHAN:What You Know B

(Stockton's Wingの元フロントマンの Mike Hanrahanの2002年作。プロデュースは Tír Na NÓg、Scullionの Sonny Condell。全曲自作曲か Sonny Condell他との共作曲。レイドバックというか、独りの時間を愉しむような浮遊感と夢心地さが心地よい。適度のフォーク・ロックっぽさも心地よい。2002作。Dinky)

*JASON O'DRISCOLL:Dharma a

(アイルランドの SSWの Jason O'Driscollの2003年作。素直で緩やかな唄が心地よい。2003作。Jason O'Driscoll)

*NILS LOFGREN BAND:Live D

(Nils Lofgren Band～N.Lofgren、Timm Blery{ﾄﾞﾗﾑｽ}、Buck Brown{ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ、ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}、Wade Matthews{ﾍﾞｰｽ、ｳﾞｫｰｶﾙ}～の2002年、米国メリーランド州アナポリスでの二枚組ライヴ。"I Dont Wanna Talk About It"、"First Time Ever I Saw Your Face"等を含む全23曲。Nils Lofgrenはいつもかっこいい。2003作。Hyperension。検品してお送りします)

*LORRAINE JORDAN:Send My Soul B

(両親がアイルランド人でウエールズ生まれの女性 SSWの Lorrane Jordanの本作は、心動かされる唄の連続。珠玉の収録曲。w.Sean Whelan,John Wallace,Steafan Hannigan,Cormac Byrne,etc. 2019作。Hazellville Music)

*LOUISE CONNELL:Squall Echo Tale A

(スコットランドの女性 SSWの Louiseの本作は、これまでにリリースした三枚のシングルを一枚のアルバムにまとめた18曲収録のファースト・アルバム。細やかな神経の行き届いたシンプルでエレガントな美しい音楽と感受性豊かで細やかなニュアンスに富む印象的なヴォーカルは耳に新鮮。ヒドゥン・トラックに可愛らしい曲が隠されている。2019作。9th Story)

*RACHEL SERMANNI:So It Turns A

(スコットランドの女性 SSWの Rachel Sermanniの三枚目。スコットランドから離れて、ベルリンの Jazzanovaスタジオでライヴ録音

された本作は、Rachel のささやくような不思議感のあるヴォーカルは自身のキラキラ感のあるギターなどを伴って、じわりじわりと川のせせらぎ感や森の木漏れ日感が感じられる彼女独特なアンニュイな世界へと誘う。有機的なナチュラル感があって、Rachel の唄と空気のように一体化している。Rachel Sermanni のサイン入り。2019 作。Rachel Sermanni)

*ODETTE MICHELL:The Wildest Rose A

(素朴な味わいが素敵なハートフォードシャーを拠点に活動する女性 SSW の Odette の初アルバム。トラッド曲"True Lovers Farewell"以外の曲は全曲 Odette の自作曲。Megson の Stu Hanna のプロデュースによる本作は、ほのかに英国トラッドの香りのする爽やかで、愁いのあるブリティッシュ・フォーク。プロデューサーの Stu に加えて、Phil Beer や Cara Dillon のツアー・メムバーの Toby Shaer のお二人が心から付き添って、野のバラのように美しい Odette の着飾らない唄を優しく引き立てている。2019 作。Odette Mitchell)

*THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell B

(ノーサンバーランドの James と Sam の Gillespie 兄弟の二枚目。二人のヴォーカルとフィドルとギターが織りなすフォークは渋く麗しくかつ愛おしいフォーク。兄弟の穏やかで英国的に愁いのあるハーモニーはそこはかとなく美しい。影響を受けたシンガーとして Dick Gaughan, Anne Briggs, Leonard Cohen, Kathryn Tickell などの名を挙げている。2018 作。Brothers Gillespie)

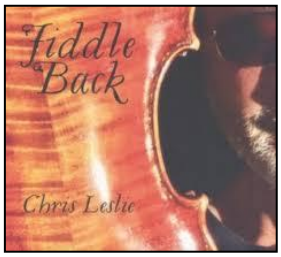
*HALPIN & KALEY:Chasing Time In Paradice C

(知る人ぞ知る SSW 系アルバムの名盤。1996 作。Streetwise)

*DAVID HUGHES:Active In The Parish D

(知る人ぞ知る英国フォーク系 SSW アルバムの名盤。w. Jacqui McShee, Gerry Conway, Eddi Reader, G.T.Moore, Paul Millns, Nigel Portmans-Smith。1995 作。The Folk Corporation)

[CD/FAIRPORT&ALBION FAMILY]



(Chris Leslie)

*CHRIS LESLIE:Fiddle Back B

(新型コロナ禍のロックダウンでツアーやライヴが行えない状況下、バランスを保つためにやりたいことは何か、前向きに心をから作りたいと思うものは何かを考えた結果が本作を作る考えに至ったそうだ。収録は 2020 年の５月末から６月上旬。場所は Chris の自宅。フィドルとヴォーカルが中心の完全ソロだが、使用楽器はフィドルを含めて 13 台。収録曲 13 トラックの内７トラックがトラッド曲で６トラックが自作曲。次第にワクワクしてくるような Chris の自作の唄"The Traveller's Song"から Chris の心の音楽の旅が始まる。声はいつもの高めのセンシティヴな声だ。続くフィドルをフィーチャーしたアイリッシュのメドレーでサマーフ

ェス気分に突入。もちろんイングランド･スタイルのダンス空気に満ちたフィドルもメチャ楽しいが、彼の音楽は海を渡る。ノルウェーのフィドルのハルディングフェーレの演奏では、心は北欧へ。米国のトラッド曲ではオールドタイミーなフィドルで酔わせ、アルプスのトラッド曲では、変拍子のフィドルで遊ぶ。Chris 自身のハミングがこれまた楽しい。新型コロナ禍がなければ、生まれ得なかったイマジネーション豊かな素晴らしい音楽だ。唄も演奏も旅する心に満ちて、自由を謳歌している。音楽の力。三つ折りデジパックの内側には楽器製作者や使用楽器の数々に、そしてマイクにまで謝意が表されている。「ステイホーム」は愛用楽器や機材などと向き合う特別な時間にもなったんだね。2020 作。Paws)

*CHRIS LESLIE WITH BERYL MARRIOTT:The Gift B
(1994 作。Beautiful Jo)

*DAVID HUGHES & CHRIS LESLIE:Acoustic Christmas ¥1400
(英国の SSW の D.Huges と Fairport のシンガーの C.Leslie の夢の共演盤。ギターとマンドリンの伴奏による耳と心に新鮮なクリスマス･ソング集。全 6 曲の 24 分。簡易紙ジャケット仕様。1998 作。Folk Corporation)

*FAIRPORT CONVENTION:Shuffle and Go B
(S.Nicol,D.Pegg,Chris Leslie,R.Sanders,G.Conway の Fairport の新作。聴かせどころ色々。交互にリード･ヴォーカルを取る Chris Leslie と Simon Nicol の陽と陰の味わいのある純正英国フォークは SSW 系英国フォークとしても凄い魅力な上にアイリッシュやモリス･ダンスなどのダンス･サウンドを取り入れた軽やかなフォーク･ロックは心を開放的にする。フットワーク軽く、前向きで健やかさや優しさが感じられる Fairport の晴れやかな英国フォーク＆ロックだ。2020 作。Matty Groves)

*FAIRPORT CONVENTION:Some Of Our Yesterday A
(副題"Anthology 1985-1995"。23 トラック収録の二枚組。2001 作。Sanctuary。検品してお送りします)

*ALBION BAND:Captured A
(1990&91 年の Albion Band{A.Hutchings,Julie Matthews,Phil Beer,Simon Care,Trevor Foster}と 1992 年の Albion Band{S.Care と T.Foster が抜け、ギターの Keith Hinchliffe が加入}の音源からの編集盤で全 13 トラック。2009 作。Talking Elephant)

*SANDY DENNY:The Best Of Sandy Denny C
("20 Century Masters The Millennium Collection"。10 曲。2002 作。Canada A&M))

[CD/ＥＮＧＬＡＮＤ，ＩＲＥＬＡＮＤ]

(Wilderness Yet)

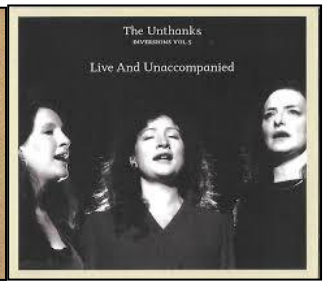
*WILDERNESS YET:Wilderness Yet B

(これほど素晴らしい英国トラッドと出逢えるとは！ヴォーカルのRosie Hodgson嬢はBBC Young Folk Awardのファイナリストらしいが、そんなこと吹き飛んでしまう凛として軽やかで胸キュンなシンギング。今現在、ブリテン諸島のトラッド系の若手女性シンガーで、Rosieの右に出る者はいないと思うほど。Nancy Kerrを初めて聴いたときのような感動。このトリオ、Rosieは英国人だが、Rowan Piggott{ヴォーカル、フィドル}は元デダナンのCharlie Piggottの息子で、アイルランドの西海岸育ち、Philippe Barnes{ヴォーカル、ギター、フルート他}は、リムリック大学出身者でDavid Munnelly Bandツアー・メムバー。英国トラッドの伝統的スタイルに強く影響を受けたRosieのシンギング、それも清楚で若々しいシンギングの魅力は絶大で、かつRowanのフィドルとPhilippeのギターと笛の演奏はセンス抜群で、職人技的に細やかな演奏で、Rosieの唄の世界を彩る。しかも二人はハーモニー・ヴォーカルでRosieの唄の魅力度アップの役を果たしている。クレジットにはない13曲目{Seán O Duibhir A Ghleanna〜曲名はRowanに教えてもらった}は、Rosie抜きで、Rowanがヴォーカルそして Charlie Piggott{アコ}とJohnn Ringo McDonagh{バウロン}をゲストに迎え、アイリッシュで幕。Rowanのソフトなシンギングが実に素晴らしい。ブックレットを開けば、全てが不思議なメルヘンの世界。2020作。
Wilderness Yet)

［CD/ＥＮＧＬＡＮＤ］

(Fay Hield)

(Shirley Collins)



(Unthanks)

*FAY HIELD:Wrackline B
(直前入荷。The Full Englishのメムバーで押しも押されぬイングランドを代表するトラッド・シンガーのFay Hieldの待望の新作。伝統歌６曲に共作を含めFayの自作曲６曲{"Cruel Mother"の返答歌等全曲トラッド調}の計12曲が収録された本作は、妖精、幽霊、動物界の「異世界」をテーマにしたアルバム。流石トピックからのリリース！と感嘆の声を上げるほど、Fayのシンギングは凛として素晴らしく、Rob Harbron{コンサーティーナ、ギター、ハーモニウム他}, Sam Sweeney{フィドル、ニッケルハルパ他}, Ben Nicholls{ダブルベース}, Ewan McPherson{口琴}等による演奏は、英国トラッドの香り高く、理想の上を行く英国トラッドを生み出している。「異世界」が作用してのことか、Fayの魔法ががかったシンギングの魅力は、言葉では言い表せないほど。プロデュースは今最も信頼のおけるAndy Bell。ジャケット内側の絵もブックレットの絵も「異世界」の不思議というか奇妙な絵ばかり。Fayの空を見上げ、バンジョーを爪弾くジャケットも印象的。英国トラッド・アルバムの最高傑作。2020作。
Topic)

*SHIRLEY COLLINS:Heart's Ease A

(今年の7月で85歳になったChirley Collinsの新作で通算八枚目のソロ･アルバム。プロデュースは元OysterbandのIan Kearey。録音は知らない誰かさんの前でうたうのはナーバスになってしまうので、自宅で録音したという。この選択は大正解。Shireyは1950年代や60年代のレパートリーなど古くからの愛着のあるトラッド曲等をリラックス･ムードでゆったりとシンギングする。特筆すべきは、12弦ギター、エンジェル･ギター、ソプラノ･ウクレレ、マンドリン、エレキギター、ボトルネック･ギター、12弦ドブロ、スライド･ギター、ギター、低音ギターそしてベース等で巧みな伴奏を付けるIan Kearyの技ありの伴奏。派手さを抑えた気品や優雅さのある音色が、Shirleyの滋味豊かなシンギングをさりげなく引き立たせていて、民謡として親しみやすく、かつその味わいは気高く深い。伴奏者はIan以外に八名ものゲストが参加していることがウィキペディアで分かるが、Ianの伴奏＋付け足し程度の助演に聞こえる。ところでShirleyさん、何枚名盤を世に送り出せば良いの?!2020作。Domino}

*UNTHANKS:Live And Unaccompanied～Special Film Edition D
(Diversions Vol.5。CD＋DVD{PAL}セット。CDはBecky Unthanks, Rachel Unthanks,Niopha KeeganのUnthanksの新作は、2019年に英国とアイルランドで行ったライヴ音源からのセレクションで全13トラック。トラッドはもちろんのことPeter BellamyのナムバーやNick Drakeの母親のMolly Drakeのナムバー、或はMimi Farinaのナムバー等、フォーク系の幅広い曲目をアカペラでうたったもの。どの唄も音楽の旅をしてきた彼女達の初心に帰ったかのような凛として美しいハーモニーに息をのむ。ラストを飾るトラッド曲"Farewell Shanty"では観客もアカペラに加わり、合唱で幕。DVDはコンサートのハイライト･シーンやツアー中のドキュメンタリー等見所ふんだん。26分35秒。2020作。Rabble Rouser)

*ROSIE CARSON & KEVIN DEMPSEY:Nightbirds B
(Dando Shaft、Whippersnapperのギター奏者でシンガーのKevin Dempseyとアイリッシュ系フォーク･シンガーでフィドル奏者の世代違いの男女のデュオ。KevinはRosieという美しい花を得て、Kevinの英国フォークの美学を深めた独自の英国フォークを開花させていて、もううっとり。小春日和な日にのほほーんと聴いていたくなる。トラッド曲と自作等のSSW系の曲が半々。2016作。Haystack)

*PETER KNIGHT'S GIGSPANNER BIG BAND:Natural Invention B
(元Steeleye SpanのPeter Knight{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ}が率いるトラッド･バンド～メムバーは紅一点のシンガーで、男女デュオのEdgelarks{2019年作"Feather"は素晴らしかった}のHannah Martin{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}とEdgelarksのPhillip Henry{ﾄﾞﾌﾞﾛ､各種ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ}に、John Spiers{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ､ｳﾞｫｰｶﾙ}, Roger Flack{ｷﾞﾀｰ､ﾍﾞｰｽ､ｳﾞｫｰｶﾙ}, Sacha Trochet{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ､ﾍﾞｰｽ､ｳﾞｫｰｶﾙ}～による2019年作。Hannahの声質が低めでしっとりした感じであること、そして音楽志向がよりトラッド＆ルーツ志向であることなど、独自の英国トラッドを創作していて圧巻。2019作。GSCD007)

*JACKIE OATES & JOHN SPIERS:Needle Pin,Needle Pin B
(Jackie Oatesの本作はSpiers & Boden、BellowheadのJohn

Spiers との共演盤。本作はイングランドのトラッドの豊かさと底力を普段着の演唱で実演した名盤。音楽の主導権は Jackie。Jackie がフィドルやピアノを演奏し、シンギングするのに合わせて、John がヴォーカル・ハーモニーし、メローディオンで共演し響演する。実はこの、Jackie の唄や演奏に寄り添って、ダンサブルな演奏をする John の演奏が本作をふくよかな音楽にしている。音楽の目線は母親になった Jackie の母親＆子ども目線。そうして生まれた音楽は普段の音楽活動の上に育まれたとても心躍り、心和む瑞々しいイングランドのトラッド。自家製見開き紙ジャケの限定盤。CD-R。2020 作。Jackie Oates & John Spiers)

*SANDRA KERR:Rebels With Her Chords B
(自身のコンサーティーナの弾き語りに娘の Nancy Kerr がハーモニーで加わった自作曲"Young Girl Upon The Road"で始まるヴェテラン・フォーク・シンガーの Sandra Kerr の本作は、イングランド北東部の伝統音楽をベースにした Sandra 流に消化されたトラッド・スタイルで、トラッド曲や自作曲を N.Kerr & James Fagan 夫妻と一緒にホームメイド感覚で演唱する。その、例えば自宅の庭で生演奏するようなオープンな感覚がすこぶる気持ちよい。2019 作。Sandra Kerr)

*ROOT & BRANCH 1 "A New World" C
(厚紙製パッケージが劣化した中古状態の新品。英国の EFDSS 制作の CD ジャーナル。本作のテーマはかつて国境や言語や文化といった様々な垣根を越えて伝承されて現在も歌い続けられている伝統歌を紹介したもの。Cara Dillon,A.L.Lloyd,Doc Watson, Cathal McConnell,Paul Brady,Walter Pardon ほかによる全 20 曲。1999 作。EFDSS)

*RUTH NOTMAN & SAM KELLY:Changeable Heart B
(10 年振りの Ruth Notman の三枚目。本作はアイルランド系英国人シンガーでマルチ楽器奏者の Sam Kelly とのデュオ・アルバム。仕掛け人は Kate Rusby のご主人で、本作のプロデューサーの Damien O'Kane。本作は Ruth の 2007 年のデビュー作"Thread"と通じる音楽性を保持していて、"Thread"の延長線上の素朴だが極上の男女のデュエット版として結実している。Ruth の素朴なシンギングは Kate Rusby のシンギングを想起させもする。2019 作。Pure)

*THE TRANSPORTS "A Tale Of Exile And Migration" A
(Peter Bellamy の伝説的名作"The Transports"{オーストラリアへの囚人の搬送の歴史的実話をもとに制作されたバラッド・オペラ}から 40 年。その"The Transports"を新たなラインナップで、再演したもの。全 28 トラック。2018 作。Hudson)

*JOE HUTTON:Northumbrian Piper C
(Kathryn Tickell に多大な影響を与えたスモールパイプ奏者の Joe Hutton{1923-1995}の名作。1994 作。East Allen Recording)

[DVD/ＥＮＧＬＡＮＤ] NTSC all regions

*ELIZA CARTHY:My Music A
(Eliza Carthy with Jon Boden,John Spiers,Ben Ivitsky,Gideon Juckes の白熱の生演奏からスタートする Eliza Carthy のドキュメンタリー DVD。Eliza Carthy のソロの生演奏と上記編成バンドの生演奏をの合間に、Watersons のライヴや Martin Carthy のギター演奏や Marry Waterson&Oliver Knight のライヴ等 45 分。2013 作。Gonzo)

[DVD/ＥＮＧＬＡＮＤ] PAL all regions

*NIC JONES:The Enigma Of Nic Jones A

(1982 年二月の交通事故の振り返りから幕開けする Nic Jones のドキュメンタリー DVD。2010 年の"Sidmouth Folk Festival"での Nic Jones Trio{Nic Jones,Joe Jones,Belinda O'Hooley}のライヴを含む 88 分。Topic)

[Single CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]

*EQUATION:In Session ¥1490

(Kate Rusby&Kathryn Roberts＋Lakeman Brothers の五人組。今となっては貴重な 1995 年のライヴ。全三曲。Crapstone Music)

[CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ系]

(Brian & Fiona)

(Gnoss)

*BRIAN Ó hEADHRA & FIONA MACKENZIE:Tuath B

(副題"Songs Of The Northlands"。Anam や Cruinn で共にゲール語によるスコティッシュ・トラッドの創作と普及にケルト音楽シーンの最前線で尽力してきた Brian と Fiona の新作。そのポジティヴな姿勢は本作でも不変。本作ではスコットランドのゲール語ソングのみならず、アイルランドのゲール語ソングやガリシア語の唄をゲール語に変えてうたったり、男女のシンガーによるスコティッシュ・トラッドの旨みと魅力を伝統的スタイルできっちりと表現した上で、多彩なリズムを取り入れた先進的サウンドとのコラボにも果敢に挑戦している。そうした試みは、二人のシンギングのケルティックなエキゾティックさを増幅させる成果を生んでいる。音作り云々を超えて、二人の魂のシンギングは心に響く。Anam 時代から較べると、熟練トラッド・シンガーとして、その成長ぶりが実感される。伴奏者は Mike Vass{ｻｳﾝﾄﾞ・ﾃﾞｻﾞｲﾝ、ﾃﾅｰ・ｷﾞﾀｰ、ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}, Innes White{ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}, Tom Gibbs{ﾋﾟｱﾉ、ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ}にバッキング・ヴォーカルのÓrla & Róise Ní Eadhra だが、Mike Vass のサウンド・デザインというのが、結果的にスコティッシュ・トラッドの新たな地平を切り拓くポイントになっているのではないか。歌詞英訳付。2020 作。Naxos)

*GNOSS:Drawn From Deep Water B

(Gnoss は Aidan Moodie{ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}、Craig Baxter{ﾊﾞｳﾛﾝ他}、Connor Sinclair{ﾌﾙｰﾄ、ﾎｲｯｽﾙ}、Graham Rorie{ﾌｨﾄﾞﾙ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}の四人組。全員がエディンバラの英国王立スコットランド音楽院の現役または出身者。ニュー・スコティッシュ＆ケルティック・ミュージックというか、若いのに、いや若いからか、センスがフレッシュで創り出された音楽は、緩急自在で即興性があり、グルーヴ感があり、高度で隙が無く、ケルティックに完璧度を高めている。フルート、フィドル、ギターそしてバウロン等ひとつひとつの楽器

が実に良くうたい、響き合っている。みんなで知恵を出し合って、スコティッシュ＆ケルティック・ミュージックの最高級品を目指したら、出来上がったのが本作！という印象の文句をつける隙さえ許さぬ前々へと突き進む完璧さ。そしてAidan Moodieがヴォーカルを取る唄ものの四曲{内三曲は女性シンガーがハーモニー・ヴォーカル}がこれまた絶品。Produced by Ross Ainslie。良すぎ。2019作。Gnoss)

*HILARY DE VRIES:雨のち桜 B

(スコットランドの女性ハープ奏者ヒラリー・ドゥ・ヴリースの金属弦の小型スコティッシュ・ハープ"クラルサッハ"によるハープソロ。音楽はカナダの詩人Robert MacLeanが日本を舞台に詠んだ詩にHiraryが曲を付けて演奏したもので、曲数は24曲。音楽は静寂感があって日本情緒が感じられるものだが、一音一音にキラリ感のあるきらびやかな音色は、光に当たって輝く雨つぶや清らかな水の流れのような印象で、クラルサッハならはの美しい音楽の世界が創り出されている。もちろんその音楽は日本の桜や四季の彩りや風景などをテーマにした詩を味わう感性と作曲家としての才能と演奏力があってのことだが。ハープの音はチターの音のようにも聞こえる。心が洗われるような音楽。短い解説文には日本語訳が付いている。2020作。Boarstone)

*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway A

(Northern FlywayはSalt HouseのJenny Sturgeon{ヴォーカル、アーモニウム、ダルシマー}とシンガーでマルチ楽器演奏家のInge Thomson{ヴォーカル、アコ、親指ピアノ、フルート、シンセ、ウェーブドラム他}の二人が立ち上げた鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込んだ本作は、同じレーベルから発売されたKarine Polwartの自然環境保護への思いを込めた"A Pocket Of Wind Resistance"と通底する清々しいスコティッシュ・フォーク/トラッド・アルバム。w,Jason Singh, Sarah Hayes。2018作。Hudson)

*DICK GAUGHAN:The Harvest Tapes A

(副題"The Definitive Gaughan Concert From 1982"。本作は名盤"Handful Of Earth"の翌年の1982年に、Dick Gaughanが米国マサチューセッツにあるOld Cambridge Baptist Churchで行ったライヴ10トラック{12曲}と未発表音源曲3トラックを加えた13トラック{15曲}を収録したアルバム。Dick Gaughan節に身震い。2019作。Greentrax)

*CLUTHA:Live From Harvard B

(屈指のトラッド・シンガーのGordeanna McCullochを擁したスコットランドの先駆的トラッド・グループ"Clutha"の1981年のライヴ。既にスコテイッシュ・トラッドの完成形を体現していて、改めて彼らの偉大さを思い知らされる。2019作。The Clutha)

*STUART A JACKSON:M'arach B

(副題"Gaelic Songs From My Upbringing"。スコットランド西部のモバーン出身の若きゲール語シンガーのStuart A Jacksonのデビュー作。穏やかなスコティッシュ・サウンドを伴ったStuartの柔和で初々しいシンギングは、何十年も前にArthur Cormackのゲール語トラッド・アルバムを初めて聴いたときの感動を思い起こさせる。ピュアーで美しい男性ゲール語シンギング・アルバムだ。2019作。Clachan Music)

*ALEXANDER MCCALL SMITH & JAMES ROSS

:These Are The Hands A
(作家のアレグザンダー･マコール･スミスがスコットランドの過去と現在の海にまつわる出来事や話などを綴った詩にピアニストの James Ross がスコットランドのトラッドのスタイルで曲を付け、元 Cherish The Ladies の Michelle Burke とスコットランドのヴェテラン･トラッド･シンガーの Kathleen MacInnes の二人がソロで、あるいはデュエットしたアルバム。w.Patsy Reid,Ryan Young,Liam Bradley,etc. 2019 作。Greentrax)

*IAIN MacFARLANE & INGRID HENDERSON
:Cockerel In The Creel B
(Blazin' Fiddles のヴェテラン･フィドル奏者の Iain MacFarlane とヴェテラン女性ハープ奏者の Ingrid Henderson の夫婦によるフィドルとハープ又はフィドルとピアノのデュエットをベースにしたスコティッシュ･トラッド･アルバム。スコティッシュ･トラッドのセンスが散りばめられていて、スコティッシュの香りを放つスッピンのサウンドが心地よい。2019 作。Old Laundry)

*MAIRI SINE CHAIMBEUL:Thall An Loch Aillse A
(Mod の優勝者でスコットランドのゲール語の女性トラッド･シンガーの Mairi Sine Chaimbeul の 2007 年作。w.Mary Ann Kennedy, Seoras Campbell,Findlay Napier,Hamish Napier,Ali Hutton, James Graham,Gillebride MacMillan。2007 作。Macmeanmna)

*ELLEN MITCHELL:On Yonder Lea A
(副題"Scots Songs & Ballads"。グラスゴー出身の女性トラッド･シンガーの Ellen Mitchell の 2002 年作。Ellen の自然体のシンギングは、適度に抑揚感を保ち、素朴で温かく気高い。全 14 曲。w.Jack Beck{ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Tom Spiers{ﾌｨﾄﾞﾙ}。曲目解説付。2002 作。Living Tradition。検品してお送りします)

*OLD BLIND DOGS:Room With A View A
(Old Blind Dogs の結成 25 周年記念アルバム。メムバーは、J. Hardie に Aaron Jones{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌﾞｽﾞｰｷ他},Ali Hutton{ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ､ﾎｲｯｽﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ}､Donald Hay{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ､ｳﾞｫｰｶﾙ}。横綱級スコティッシュ･トラッド。2017 作。OBDmusic)

*NUA:Head Full Of Dreams a
(ご存じ Nua は二姫二太郎の世界トップ･クラスのケルティック･バンド。四名の内三名がドイツ人で、残りの一人がオークニー島出身の Catriona Price。Catriona と、もう一人 Michaela Grus の二人の歌姫のシンギングは今が旬なシンギングで胸キュン。Beoga の Niamh Dunne が賛辞を寄せている。2013 作。Liekedeller)

*TWELEFTH DAY:The Devil Makes Three a
(オークニー島出身の歌姫でフィドル弾きの Catriona Price と各種ハープ弾きでシンガーの Esther Swift の女性の二人組のとびっきりの本作。生き生きとしたスコティッシュ･サウンドに彩られた二人のシンギングは、まるで花園の色とりどりな花。2014 作。Orange Feather)

*JENNIFER&HAZEL WRIGLEY:Dancing Fingers a
(オークニー島の Jenniffer&Hazel 姉妹の枚目。1991 作。Attic)

*JENNIFER&HAZEL WRIGLEY:The Watch Ston(1994 作。Attic) a

*THE ORKNEY SESSIONS a
(毎年５月下旬に開かれているオークニー･フォーク･フェスのメイン会場でのライヴ。全 40 曲。1995 作。Attic)

［CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系］
デジパック･タイプを含め､元々開封されているものが多数あります。

(Charlie Piggott)　(Daoiri Farrell)　(Varo)　(M.McGoldrick,J.McCusker,J.Doyle)

*CHARLIE PIGGOTT:The Days That Are Gone　B
(9/20 入荷予定。デダナンの創設メムバーでボタン･アコーディオン奏者の Charlie Piggott の新作。Gerry Harrington とのデュオ･アルバム"The New Road"から 19 年振りの新作。共演は Wilderness Yet のメムバーで Charlie の息子の Rowan Piggott{ﾌｨﾄﾞﾙ}、Frances Marriott{ﾌｨﾄﾞﾙ}､Johnny 'Ringo' McDonagh{ﾊﾞｳﾛﾝ。De Danann}､Garry O'Briain{ﾏﾝﾄﾞﾁｪﾛ､ﾋﾟｱﾉ。Boys Of The Lough, Buttons & Bows}。これは楽しみ。2019 年 12 月リリース。Scribe)

*DAOIRI FARRELL:A Lifetime Of Happiness　C
(2013 年のオールアイルランド･チャンピオン･シンガーでアイリッシュ･バンド"FourWinds"のツアー･メムバーだったというトラッド･シンガーの Daoirí Farrell の 2019 年のアルバム{コピーライトは 2018 年}。久し振りに聴く自然体のアイリッシュ･シンギング。その無理のないコブシが実に心地よい。プロデュースは Dónal Lunny。Dónal 自身ギター､ブズーキ､バウロン他で Daoiríのシンギングに寄り添う。Dónal の薦めの Frank Harte のレパートリー曲の"The Connerys"や Cathal McConnell に学んだという"There's The Day"{Cathal と何度か一緒にうたったこともあるという}と"Sweet Portadown"や Liam Weldon の"Via Extasia"等々どこだわりの選曲{ラヴソングが多い}を Daoiríは腰を据えてシンギングする。w.Dónal Lunny,Pat Daly,Seán Garvey,Robbie Walsh,Peter Browne,Tara Finn,Máire Ní Chróinín,Mark Redmond 他。Daoirí Recordings)

*VARO:Varo　¥2390
(Varo は Lucie Azconaga{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾊｰﾓﾆｳﾑ､ｳｸﾚﾚ}と Consuelo Nerea BreschiVaro{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾊﾞｳﾛﾝ}のフランス人とイタリア人のアイリッシュ･トラッドの女性二人組。二人は 2015 年にアイリッシュ･トラッドを学ぶために訪れていたダブリンで出逢い､すぐさまデュオ活動を始めたという。曲目はアイリッシュ中心だが､イングランドのトラッドの名曲"Savoy"{二人が初めて聴いたのは Anne Briggs のアルバムだそうだ}なども演唱していて､二人のトラッドへのアプローチは､70 年代の英国フォーク的､或いは 70 年代の英国フォークの影響を受けたアイリッシュ･フォーク的なアプローチで､70 年代のブリティッシュ～アイリッシュ･フォーク的な上品さや芳香が感じられる音楽で､二人のフォークっぽくもエレガントなヴォーカル･ソロ＆デュエットとフィドルをフィーチャーした気高く心高鳴るトラッド･サウンドで魅了する。ゲスト:Frank Tate{ﾌﾞｽﾞｰｷ､ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}､Helen Diamond{ｳﾞｫｰｶﾙ}

,Ultan O'Brien{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｨｵﾗ},Ben MacKenzie{ﾌｨﾄﾞﾙ}｡2020 作｡
Varo)
*MIKE McGOLDRICK･JOHN McCUSKER･JOHN DOYLE
:The Reed That Bends In The Storm B
(参りました｡アルバム多産なことではなく､このトリオ～M.
McGoldricike{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ､ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ､ﾊﾞｳﾛﾝ､ｷﾞﾀｰ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ},
J.McCusker{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾎｲｯｽﾙ､ﾊｰﾓﾆｳﾑ､ｱｺ},J.Doyle{ｳﾞｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ､ﾌﾞｽﾞｰｷ､ﾏﾝﾄﾞﾗ}～のレパートリーの豊富さと豊富なレパートリーをトリオで最高品質のアイリッシュに創り上げてしまう手腕に｡驚くのは一枚のアルバムとしての完成度の高さ｡その上に､おそらくライヴで覚えた硬軟を織り交ぜた選曲とライヴで鍛え上げた＋α
の即興的アイリッシュ･ミュージック｡加えてNic Jones等の名シンギングで知られる"Napoleon Bonaparte"等､五曲でヴォーカルを披露するJohn Doyleの名シンギング｡ラストはPlanxtyの演奏で知られる"Taimse Im Chodladh"{Words & Musicに収録}｡この曲はMikeのイリアンパイプスをフィーチャーした厳かなスローエアーで､この終り方は感動的｡完璧｡2020 作｡Under One Sky)
*JOHN DOYLE & MIKE McGOLDRICK
:John Doyle & Mike McGoldrick B
(Solas～Usher's IslandのJohn Doyle{ｷﾞﾀｰ､ﾌﾞｽﾞｰｷ､ｳﾞｫｰｶﾙ}とCapercaillie～Usher's IslandのMike McGoldrick{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ､ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ､ｳﾞｫｰｶﾙ}の新作｡コピーライトは2018 作｡なめらかなM.McGoldrickのフルートの演奏とピリ辛の利いたソリッドなJ.
Doyleのギターによるリール曲三曲のメドレーで爽快に幕開けする本作は､様々なタイプのアイリッシュを余裕綽々の名演奏で楽しませる｡演奏の豊かさのみならず､三曲でノドを振るわすJ.
Doyleのシンギングが素晴らしい｡Peter BellamyやKate Rusbyのシンギングで知られるトラッドの名曲"Lovely Willie"はAndy
Irvineのような柔和な味わいがあって絶品｡旨みたっぷりのアイリッシュ｡Boxroom Music)
*MIKE McGOLDRICK & DEZI DONNELLY:Dog In The Fog B
(1995 年の"Champions Of The North"以来､二人による二作目｡2018
作｡Boxroom Music)
*MICHAEL AND SHAY BLACK:Glackanacker B
(Black FamilyのMichael & Shay Black兄弟の新作｡プロデューサーにJohn Doyleを迎えて､Mike McGoldrick,John McCusker,Mick McAuley,Eamonn Flynn等の名演奏家とCiara,Martin,Frances
そしてMaryに､France Blackの娘のAoife Scott等の文字通りのBlack Familyの"Singers"の強力バックアップで制作された本作は､ブラック家の親族が一堂に会して､Michael & Shayの兄弟がうたって､妹たちや姪などが仲間入りしてうたったもので､リードを取るMichael & Shayの兄弟のシンギングたるや堂々として優しくそして大らか｡そして主役の兄弟のみならず､"Singers"のアイリッシュ･ソングへの並々ならぬ愛情が感じられるもの｡
2020 作｡The Black Brothers)
*SHAY,MICHAEL & MARTIN BLACK:What A Time A
(1995 年録音のブラック･ファミリーの三兄弟のアルバム｡Produced
by Maire Breatnach｡w.Maire Breatnach,Mairtin O'Connor,
Tommy Hayes,Neol Eccles,Garvan Gallagher,Greg Boland,
Seamus Brett 他｡1995 作｡Dara)

*ÉILIS KENNEDY:So Ends This Day B
(ヴェテラン･アイリッシュ･シンガーのÉilís Kennedy の新作は、1800 年代の手紙や日誌などをもとにÉilís が新たに作詞作曲した５曲と古い伝統歌による全９曲が収録されていて、1800 年代の捕鯨漁師達の世界へと優しく誘う。感情を押し殺したようなÉilís のシンギングは、19 世紀に海で生きた人々の悲喜交々が、浜辺に静かに打ち寄せる波のように心に迫ってくる。w.Gerry O'Beirne {ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰでもある},Eamon McElholm,Shaun Davey,Rita Connolly,Trevor Hutchinson。名盤誕生。2020 作。Éilís Kennedy)
*YE VAGABOND:Hare's Lament C
(Ye Vagabond は Brían & Diarmuid Mac Gloinn の兄弟デュオ。本作収録のアイルランドの伝統歌は祖父のアーカイブ音源から学んだという。その音源が何かは分からないが、彼らがブズーキ、ギター、マンドリン、フィドルの伴奏で自然体で創り出すアイリッシュ･フォークは、70 年代の Andy Irvine や Paul Brady や 70 年代の英国のトラッド･シンガーを想起させる。トラッドの名曲"Willy O Winsbury"などは僕の耳には Ann Briggs のシンギングと重なる。2019 作。River Lea)
*TWEED & CUTTING:One Roof Under B
(Kren Tweed と Andy Cutting の 2002 年のアルバム。1994 年のアルバム"Across The Waters"で共演を通して、二人はお互いの音楽から多くのことを学んだという。その結果生まれたのが、このピアノ･アコーディオンとメローディオンのデュオ･アルバム。二人は、アイリッシュを中心にイングランド、北欧の音楽を「この曲知ってる？この曲は？このスウェーデンの曲は？」等とお互いが楽しみ合って演奏しているのがビンビン伝わってくる。お二人さんが音楽にたっぷり夢を見ていた時代の輝かしい音楽。1990 年代末に Sileas の Patsy Seddon さんに逢ったとき「Karen は Andy Cutting が好きなのよ」と言っていたのを思い出した。ゲスト:Ian Carr。1994 作。Fasco)
*THE USHER FAMILY
:Traditional Singing From County Louth A
(Mary Ann Carolan{1902-1986}、弟の Pat Usher{1912-1988} そしていとこの Petey Curran{1896-1980} の Usher Family の 1974 年収録の音源から制作された地域性や方言などを含めて貴重なアイリッシュ･トラッド･アルバム。全 22 曲。約半数は 1982 年の Topic 盤で広く知られる Mary Ann の純朴で美しいシンギング。Mary の兄の Pat と従兄弟の Petey Curran のシンギングはおだやか。一家が伝承してきた民謡はどれもぬくもりがある。本作は音をクリーンアップする際に、収録時の雰囲気が伝わるように小さな音や指でテーブルを叩く音などを残す工夫がされている。2014 作。Rossendale)
*JIMMY CROWLEY:Some Things Never Change B
(コークのトラッド･シンガーでフォーク収集家の Jimmy Crowley の 1981 リリースの三枚目。バックは Declan Sinnott{ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰでもある},Christy Moore, Keith Donald,Brian Calnan{以上 Moving Hearts} に Mick Hanly,Johnny Campbell,Mandy Murphy{素敵な女性ｼﾝｶﾞｰです}。Jimmy のトラッドのアプローチは SSW 的。自己流に昇華してフォークからフォーク･ロックの範囲で自在にうたいこなしていて、唄があったかい。1981 年/2006 作。Free State Music)

*BIRKIN TREE:Five Seasons B
(イタリアのアイリッシュ･ミュージック･バンドの Birking Tree の驚きの新作。Mick O'Brien の娘で RTE RnaG フィドル･コンペティションで優勝経験のあるフィドル奏者の Aoife Ní Bhriain がリーダーシップを発揮して演奏して制作されたもので、セッションから生み出されるアイリッシュの何とハイレベルなこと！加えてヴォーカルの Laura Torteirolo 嬢のアイリッシュ･スタイルのシンギングが滅茶苦茶素晴らしい。2019 作。Felmay)
*BIRKIN TREE:Virginia A
(Martin Hayes & Dennis Cahill がゲスト参加の Birkin Tree の 2010 年のアルバム。2010 作。Felmay)
*ANDREW MURRAY:Hell Or High Water A
(Tommy Fleming の後釜のシンガーとして De Danann に加入したイニシュボフィン島出身のトラッド･シンガーの 2005 年作。w.Gavin Raiston,Aogan Lynch,Geoff Woods,Tim O'Brien,etc.2005 作。Andrew Murray)
*DEIRDRE CONNOLLY:A Song In Turn C
(開封新品。元 Cherish the Ladies。2001 作。Glentrague)
*MOHER:Out On The Ocean(1991 作。CBM) D
*SARRON SHANNON:The Acoustic Tour(2003 作。Daisy) B
*JOE HEANEY
:Irish Traditional Songs In Gaelic And English C
(1963 年録音。1989/2002 年のコピーライト。Ossian。検品してお送りします)
*FRANKIE GAVIN,RICK EPPING & TIM EDEY
:Jigging The Blues A
(F.Gavin の今度のお楽しみ会はアイリッシュのブルース仕立。共演者 Rick Epping{ﾊｰﾓﾆｶ、口琴、ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ}とアイリッシュ･ギター名手の Tim Edey。F.Gavin 主宰のアイリッシュ･ミュージック･パーティーにブルース･ハープ奏者が殴りこみ？した印象。パーティーは大盛況。二人の盛り上がりをあの手この手で支える T.Edey のギターの技も聴きもの。F.Gavin のフィドルは緩急が冴えている。2008 作。Greentrax)
*PADDY KEENAN･TOMMY O'SULLIVAN:The Long Grazing Acre A
(屈指のイリアンパイプス奏者 Paddy Keenan とギター奏者の Tommy O'Sullivan とによる大作。w.Mary Green,Triona,James Blennerhassett,Greg Sheehan,John Fitzgerald。2001 作。Hot Conya。検品してお送りします)
*BOHOLA:Bohola A
(Jimmy Keane{ｱｺ}、Sean Cleland{ﾌｨﾄﾞﾙ、ヴｨｵﾗ}、Pat Broaders{ﾌﾞｽﾞｰｷ、ヴｫｰｶﾙ}の三人組 Bohola の 2002 年作。Shanachie。検品してお送りします)
*JIM McKILLOP:Tribute A
(フィドルの名手 Jim McKillop の本作はアイリッシュとスコティッシュを中心にハンガリーのダンス曲や Ry Cooder に捧げた"Yellow Roses"等など様々なスタイルの演奏で楽しませる全 30 曲で 23 トラック。w.Pat Conroy,James Quinn。2007 作。The Online Music School)
*MATT MOLLOY･PAUL BRADY･TOMMY PEOPLES
:Matt Molloy･Paul Brady･Tommy Peoples C

(1978 作。Mulligan{英国}盤)
*KEVIN BURKE & JACKIE DALY:Eavesdropper C
(1981 作。Mulligan{英国}盤)

[CD/ＳＣＡＮＤＩＮＡＶＩＡ]
*SUEDE･NORVEGE:Musiques Des Vallees Scandinaves C
(余り知られていない北欧トラッドのスタジオ･ライヴ盤で名盤。出演者は Frifot の Lena Willemark{ヴォーカル､フィドル},Ale Moller{マンドーラ､フルート},Per Gudmundson{フィドル､コルヌミューズ}の三名とノルウェー屈指のトラッド･シンガーの Kirsten Braten-Berg とハルディングフェーレ奏者の Gunnar Stubseld の五名。スウェーデンとノルウェーのトラッド･ミュージシャンによる共演ライヴで、前半はスウェーデン､後半はノルウェーのミュージシャンをフィーした演唱。Lena と Kirsten のデュエットも数曲。北欧トラッドが初々しい。全 31 トラック。ブックレットがやや劣化気味。1993 作。Ocora)
*TRITULEN:Tritulen a
(Ebba Jacobsson{ヴォーカル},Anette Thorsheim{アコ､ヴォーカル},Jonas Åkerlund{フィドル､ギター､ヴォーカル}の二姫一太郎のトリオ。スウェーデンとノルウェーの西海岸の暮らしの中にある伝統的な音楽を演唱したもので､Ebba の柔和なシンギングといい､素朴ながら軽やかで北欧トラッドの香り豊かな音楽といい､幸せ気分の北欧トラッド。2012 作。Etnisk Musikklubb)

[CD/ＬＡＰＬＡＮＤ]
*JOHAN ANDERS BAER:Guovssu B
(ヨイク･シンガーの Johan のずしっとロックっぽいヨイク･アルバム。Johan の呪術的なヴォーカルの宇宙的な土俗性に敏感に反応するようにサウンドのヴォルテージが上がる。表面的にはロックっぽいが､音楽は根源的だ。1997 作。DAT)
*ASSU:Assu B
(Áššu はサーミの伝統的なヨイク･シンガーの Ulla Pirttijärvi のシンギングをフィーチャーした三人組。Ulla がうたうヨイクの濃さは､並外れている。霊的というか節回しには聖と俗が混ざり合って至芸の域。素晴らしいのは彼女のシンギングのみならず､彼女のヨイクにインスパイヤーされて共演者になったという各種ギターの Olav Torget と各種打楽器の Harald Skullerud の演奏の精神性の高さ。彼ら本来の音楽性は西アフリカ音楽だが､二人は Ulla の高潔な唄と出逢ったことで､西アフリカ音楽から学んだ演奏技術と感性をフルに発揮して独自のヨイクの音楽へと深化させ､類い稀なヨイク音楽へとレベルアップしている。2019 作。Bafe's Factory/Nordic Notes)

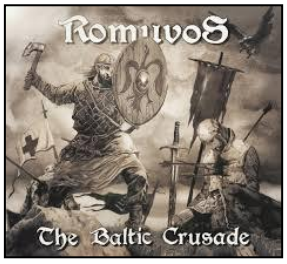
[CD/ＦＩＮＬＡＮＤ]
*DANTCHEV:DOMAIN:Say It C
(フィンランド系ブルガリア人の女性シンガーの Anna Dantchev をヴォーカルに据えた Anna を含めて五人編成バンド"Dantchev:Domain"{使用楽器はギター､各種管楽器､各種大小パーカッション､ビブラフォン等}の本作は､名前からフィンランド人と思われるバンド･メムバーで､フィンランドで録音されていて､一種独特

なブルガリアン･ヴォイスの音楽として結実している。その一種独特さは、バンドの音楽がブルガリアのリズムをベースにジャズやブルースとミックスした音楽で、Anna のブルガリアン･ヴォイスの特長を活かした自在なシンギング、それも大地の母的に悠久感のあるシンギングとポジティヴな異種交配サウンドの目新しさと醍醐味はドラマティックで鮮烈。2020 作。Glomama Music)

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]

*ATTERLJOMEN:Tonar I Tre B
(Lom{ロム}というフォーク･ミュージックが盛んな地方で育った Astrid Sulheim と Bjørn Kåre Odde と Aslak Brimi の三人のフィドル奏者のトリオ"Atterljomen"による本作は、Bjørn と Aslak が長い間に収集した Lom と Skjåk という地方のフィドル音楽集。曲目は 19 世紀から 20 世紀に活躍したフォーク･ミュージシャン達の楽曲。個々に作曲者は異なるが、三人が三色の音色で織り上げた音楽は紛れもなく極北ノルウェーのトラッドであり、フィドル･ミュージック。心洗われる全 16 トラック。2019 作。Ta:lik)
*ANNBJORG LIEN･BJORN OLE RASCH:Come Home B
(2009 作。Grappa)
*ASA JINDER:Tio Ar Som Riksspeleman 1979-1988 B
(1988 作。Eagle)
*ASA JINDER:Stilla Ro Och Nara(1988 作。Eagle) B
*ASA JINDER:Dansa Mej En Gladje(1990 作。Golden Eagle) B
*UNNI LOVLID:Rite(2009 作。Grappa) B
*KARI BREMNES:Svarta Bjorn B
(1998 作。Kirkelig Kulturverksted)

[CD/Ｌ ＩＴＨＵＡＮＩＡ]



(Romuvos)

*ROMUVOS:The Baltic Crusade B
(リトアニアの五太郎フォーク･ロック･バンド"Rumuvos"の新作で三枚目。リトアニアで 1387 に国のキリスト教化に対抗して起きた「ロムヴァの戦い」をテーマにしたアルバム。何かの霊でも乗り移ったかのような霊性を帯びたヴォーカルとハーモニーと、ニッケルハルパ、フルート、口琴等の民俗楽器とエレキギター他各種ギター、ベース、ドラムスによるある種呪術的で重厚で勇猛果敢なフォーク･ロックはもの凄い。かつてスコットランドや米国のケルティック･ロック･バンドに似たバンドがいたが、Romuvos のフォーク･ロックは、音楽的には通じるものが感じられるものの、音楽の暗黒さを秘めた高潔さとドラマティックさでかなり上を行っている。もの凄いバンドだ。2020 作。Dangus)
*UNDAN:Vidury Mareliu B
(リトアニアの一姫二太郎の三人組トラッド･グループの Udan のデ

ビュー･アルバム。アフリカの民族楽器の親指ピアノ"ムビラ"の演奏家でシンガーの Judita Butkevičiūtėの聖と俗とを持ち合わせたシンギングの何と魅惑的なこと！Merope の Indre のような夢幻感や悠久感があって、トラッド/フォークとして個性的で音楽の深みが深い。バンスリ、フルート奏者の Adomas Šimkūnas とギター奏者の Laurynas Vaitulevičius とによる音楽は、ムビラの効果や川のせせらぎの音などを含む効果音の導入などミニマル･ミュージック的な不思議さを創り出している。リトアニアの古謡の世界にタイムスリップ。2018 作。Dangus)

*MEROPE:Naktes B

(便せん様式特殊パッケージ。リトアニアの一姫二太郎の三人組トラッド･グループの Merope の三枚目。何よりの魅力はリトアニアのカンテレ系弦楽器カンクレスの演奏家でシンガーの Indre Jurgeviliciute の東欧情緒を漂わす夢幻感のあるシンギング。カンクレスの弾き語りのみでも十分にリトアニアのトラッド/フォークとして輝いていると思うことしきりだが、その上にバンスリ奏者の Jean-Christophe Bonnafous とギター奏者の Bert Cools が夢幻感のあるサウンドで静かに彩りを添えている。Indre のシンギングは子守唄のように優しく、リトアニア民謡のメロディとシンギング･スタイルで悠久の音楽を創り出している。2018 作。Granvat)

*SEN SVAJA:Kraitis Is Pelkės B

(3D{立体視}様式特殊ジャケット。2010 年結成のリトアニアの女性ヴォーカル･トリオの Sen Svaja～Dorota Girskienė{ヴォーカル､パーカッション}､Agota Zdanavičiūtė{ヴォーカル､チター､パーカッション}､Živilė Rimšaitė{ヴォーカル､チター､パーカッション}～の二枚目。古代リトアニアのフォーク･ソングに焦点を当てたという本作は、女性トリオ編成の｢ブルガリアン･ヴォイス｣のリトアニア版の印象だが、彼女達の合唱は個々のシンギングに独創性と即興性と開放感があって、女性ヴォーカル･トリオによる新感覚のフォーク･ソングを瑞々しく創作している。2018 作。Dangus)

[CD/ＬＡＴＶＩＡ]

*NAMEJS KALNIŅŠ:Laika gaitā B

(ラトヴィアのカンテレ系民族楽器の Kokle{クークル}の演奏家の Namejs Kalniņšのソロ。彼の水面に映る木漏れ日のキラキラ感までをも表現したかのような演奏は細やかで、まるで日の光や森の妖精が舞い踊っているかのように感じられる音楽。2018 作。Lauska)

*RAHU THE FOOL:Rahu The Fool D

(豪華 CD ブック形ケース仕様の二枚組。二姫三太郎の五人組の Rahu The Fool の音楽はユニーク。ウォッシュボード、ダブルベース、ギター、フィドル、フルートから奏でられる音楽は、米国のジャグバンドや古臭いブルースやジャズやカントリーと東欧風{ラトヴィア風？}のフォークとが混ざり合った異種交配サウンドで、ヴォーカルはウクライナの Uklainians やロシア民謡のような感じもある。2019 作。Rahu The Fool)

*SYMBOLIC:Muzam Saule Debesis B

(五太郎から成るラトヴィアのフォーク･ロック･バンド"Symbolic"のデビュー･アルバム。デビュー･アルバムだが、結成は 2000 年の

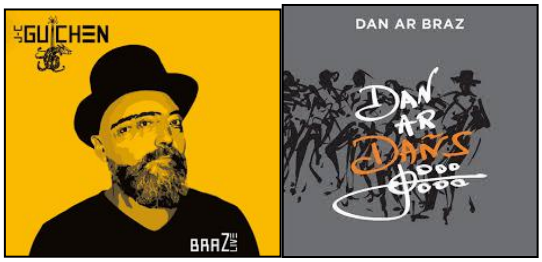
大ヴェテラン。民族楽器とロック楽器の混成だが、ドラムス、ベース、エレキギターが全面に出ていて、リード・ヴォーカルの Uldis Kakulis のラトヴィア魂を鼓舞する堂々たるシンギングと相まっヴォルテージの高いフォーク・ロックを創作している。2017 作。Lauska)

[CD/ＥＳＴＯＮＩＡ]

*SOFIA JOONS・EMMA HARDELIN・MEELIKA HAINSOO
:Strand...Ran B
(三人の歌姫によるエストニアの伝統歌集。Sofia はエストニア系スウェーデン人、Emma は Triakel、Garmarna のヴォーカルでスウェーデン人そして Meelika はフォーク・ロック・バンドの Vagilased のヴォーカルでエストニア人。歌姫達はハープ、フィドル、チター等のシンプルな伴奏で、或いは無伴奏で、孤高のシンギングで聴き手を魅了する。2001 作。Johanson&Vennad。検品してお送りします)

*MAARJA NUUT:Une Meeles B
(Maarja 嬢はエストニアの神話や伝説そして 20 世紀初めのフィールドレコーディングなどを研究し、唯一無比の優れたエストニアのトラッドを創作する。彼女のシンギングとフィドルの演奏は伝統に強く根ざしながらも、いにしえのエストニアに誘われるような夢幻性を帯びていて、先鋭性と孤高感が感じられるもの。全てが秀逸。2016 作。Maarja Nuut)

[CD/ＦＲＡＮＣＥ]



(Jean-Charles Guichen) (Dan Ar Braz)

*JEAN-CHARLES GUICHEN:Braz Liver B
(ブルターニュのギタリストの Jean-Charles Guichen の 2019 年のケルト音楽の祭典"Festival Interceltique de Lorient"でのライヴ。Jean-Charles なるギター弾きは Alan Stivell の 2000 年のアルバム"Back To Breizh"でギター担当をしていたそうだが、それはもう 20 年前の話。調べると彼は本作を収録したケルトの祭典に 35 年もの間、パフォーマンスをしているそうで、本作でのダンスの空気が充満した中での彼のエネルギッシュなアコースティック・ギター{エレキではない}を聴けば、彼のギター演奏のエネルギー源は、ケルトの祭典のような場でのライヴ体験に依ること大きいことが、すぐさま分かる。音楽的にはケルト音楽に米国のフォーク、ブルース、ロックの影響受けたギター音楽だが、そんな分析はちっちゃなことと思えるほど、即興性のあるダンサブルな白熱のギター音楽に体が熱くなる。これは滅茶苦茶凄い。そしてラストは女性シンガーは誰か分からないが、その女性シンガーによるブルターニュの国家"Bros Gozh Ma Zadou「我々の祖先の築いた国」で幕。Jean-Charles は気を引き締めてギターの伴奏に徹している。

ライヴに育てられた名ギタリスト。2020 作。Nevez)

*DAN AR BRAZ:Dan Ar Dans C

(ブルターニュのヴェテラン･ギタリストの Dan Ar Braz が最初のギターを買ったのが 1961 年。本作は彼のギタリスト 60 周年を記念して制作されたアルバム。長い活動を通して共演してきた多くのミュージシャンがこの記念作に参加し、Dan の初期の自作曲を含め、自身の音楽の旅を振り返るのに相応しいブルターニュ音楽のエッセンスを散りばめたナムバーの数々を彼の持ち味である高潔なエレキギターをフィーチャーしたフォークロックを高らかに奏で上げる。その天空に響き渡るような音楽たるや文字通り孤高。Alan Stivell 時代のフォークロックから脱皮して獲得し得たオリジナルなフォークロックだ。60 年のキャリアから来る自信は偉大。2020 作。Coop Breizh)

*YANN-FANCH KEMENER:Roudennou/Traces ¥2650

(昨年の三月に 61 歳の若さで亡くなった。本作は膵臓癌との戦いと平行して制作された Yann の二枚組の新作で遺作。本作は彼のどのアルバムをも超える素晴らしさ。彼が 45 年の歳月を費やして、農夫や労働者や放浪者や乞食などから聞き取りした民謡等を彼は一曲一曲に魂を込め、聞き取りしたときの思い出をも込めて、シンギングしている。そのシンギングたるや闘病中とは信じられないほど声が軽やかに弾んでいて、早春のような清々しささえぼくには感じられる。彼のソロ･シンギングのみならず、ギターを中心にアコやハープの伴奏そして男女のシンガーとのデュエットなど、豊かなリズム感と絶妙のコンビネーションそして総合的にブルターニュ調に彩り感を感じさせる音楽の素晴らしさは、言葉では言い尽くせない。2019 作。Buda)

*GLENMOR:Dix Ans Deja B

(ブルターニュ文化や自然環境保護に尽力し、世代を超えて多くの音楽家に影響を与えた国民的シンガーの Glenmor の 2007 年作。彼の落ち着きのあるの深い味わいのある唄の内に怒りや憧憬等の様々の情感が熱く感じられ、強さと優しさを併せ持った素晴らしい唄を朗々と聴かせる。2007 作。Coop Breizh。検品してお送りします)

*GAYANE:He Brings You Flowers a

(ブルターニュの歌姫 Gayane の 2006 年作。13 曲中 10 曲は英語で｛ﾗｽﾄの仏語の歌は英語による１曲目の仏語ヴァージョン｝、英国の夢心地な不思議女性 SSW 的。夢のような世界をきらめきのあるアコースティック･サウンド～フォーク･ロックで、Gayane らしい美意識の中で表現しきっている。2006 作。Keltia Musique。検品してお送りします)

*NOLWENN ARZEL:La Harpe De Bretagne - Strewiñ C

(両親がブルターニュの出身で、ご本人はパリ生まれのケルティック･ハープ奏者の Nolwenn 嬢のソロ。彼女にとってブルターニュの伝統音楽は夢の音楽。彼女はブルターニュの伝統音楽の個性的な民俗性を保持しながら、独自の夢感覚の色を輝かせて、幽艶で優艶なハープ･ミュージックを創作する。2014 作。Coop Breizh)

*BROTTO LOPEZ SEXTET:La Ronda Dels Viatges B

(ロジーナとマルティナの時代から時を経て、新世代のオクシタニアのトラッド･バンド。ヴォーカルは Guillaume Lopez と Lolita Delmonteil-Ayral の男女の二人。唄はこの二人が掛け合うスタイ

ル。二人とも南欧的なトラッドの香り立つシンギングだ。三曲目の"Quando io eri hilha a marider"はロジーナとマルティナもうたっていたが、伝統性の内で、新たな命を吹き込んでいる。ワールドクラス。2014 作。Camom)

*JOAN FRANCES TISNER:12 Receptas De J.A.Lespatlut B
(オクシタニアのトラッド・シンガーで民謡研究家の二枚目。南仏オクシタニアのトラッド・シンギング＆アカペラの魅力を奔放な音作りで実演する。P28 のブックレット付。2004 作。Menestres Gascons。検品してお送りします)

*RONDEUS E CONGOS DE LAS LANAS C
(Joan Francés Tisner の指導の下で制作された南仏オクシタニアのトラッド。素晴らしい。1998 作。Menestrers Gascons)

*ALAN STIVELL:Legende(1983 作。Dreyfus) a

*ALAN STIVELL:Again(1993 作。Dreyfus) A

*ALAN STIVELL:Back To Breizh(1999 作。Dreyfus) A

*ALAN STIVELL:Au-Dela Des Mots A
(英題"Beyond Words"。w.Ronan Le Bars{ｲﾘｱﾝ･ﾊﾟｲﾌﾟｽ},David Hopkins{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}。2002 作。KeltiaⅢ)

*ALAN STIVELL:Emerald A
(2009 作。KeltiaⅢ)

*SOLDAT LOUIS:Happy...Bordee 20 Ans D
(結成 20 周年記念ライヴを収録した二枚組盤。ヴォーカル&ギターの S.Louis 名義のアルバムだが、実質的に七人編成ケルティック・ロック・バンドとして、いわばブルターニュの Runrig のようなバンドで、孤高のケルティック・ロックを勇猛果敢に創作する。2009 作。Coop Breizh)

[CD/SWITZERLAND]

*SWITSERLAND - Archive Of Folk Music A
(副題"Collection Constantin Brailoiu{1927-1951}。世界の民族音楽の収集家でハックブレット奏者の Constantin Brailoiu の名演奏集。全 65 曲収録。英語解説書付。パッケージは DVD ケース。2009 作。Disques VDE-GALLO。検品してお送りします)

[CD/ＰＯＲＴＵＧＡＬ]

*SEIVA:SEIVA B
(Joana Negrao{ｶﾞｲﾀ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}､Vasco Ribeiro Casais{ｷﾞﾀｰ､ｶﾊﾞｷｰﾆｮ､ｶﾞｲﾀ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}､Rita Novoa{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}による音楽は、大地の音を響かせ、Seiva のヴォーカルは民俗色を強めてパワフル。驚きのシンガーだ。2015 作。Galileo)

[CD/ＳＰＡＩＮ]

*ALJIBE:El Motin De Aranjuez C
(1808 年にスペインで起こったアランフエス暴動を舞台化した劇の音楽。その音楽を担当したのがスペインの七太郎のトラッド・グループの"Aljibe"。スパニッシュ・ギター、ダルブッカ、リュート、サンフォーニャ、アコ、クラリネット、フルート、オカリナ、パーカッション等による音楽はスペインの民衆音楽をカラフルに再現し、リード・ヴォーカルの Juan Rodriguez は意気揚々としたシンギングで歴史ドラマの世界へと誘う。各メムバーの演奏力

が高く、総合力でスペインの民衆音楽として音楽の質が高い。
1998 作。Several)
*TRIQUEL:Rock Celta C
(1991 年結成のスペインの本作収録時六太郎の大型ケルティック・ロック・バンドの 2008 年のアルバムでラスト・アルバム。彼らのロックはアイリッシュ・トラッドや英国のフォーク・ロック直輸入型のフォーク・ロック。全ての演唱が優雅で高潔で圧巻。未体験のフォーク・ロック・ファンはぶっ飛ぶよ。2008 作。Armando)
*FOLK ON CREST:Calle De La Botica C
(Folk On Crest はケルト音楽の隆盛に刺激を受け、結成されたスペインの若いケルト系トラッド・バンド。ガリシアのムイニエーラなどをバグパイプ、ホイッスル、ギターがケルティックなサウンドを高らかに響かせ、紅一点の Yolanda Rio がパーカッションを打ち鳴らし、抜群のシンギングで釘付けにする。恐るべきスペイン発のトラッド・アルバム。2011 作。Severalia。検品してお送りします)
*TAHONA:Relamidos B
(1972 年結成で本作が 11 枚目というレオン・カスティーリャの男性トリオ"Tahona"の本作のテーマは「料理への賛辞」。アコ、ヴァイオリン、ギター、リュート、各種パーカッションがスペインの民俗音楽を奏で、三人が様々なシンギングで伝統歌を、ある時はユーモアたっぷりに、またある時は祝宴ムードたっぷりに料理して楽しませる。2009 作。Several)

[CD/ＡＳＴＵＲＩＥＳ]
*HEVIA:Tierra De Nadie/No Man's Land A
(ガリシアではなくアストゥリアスを代表するバグパイプ奏者 Hevia の 2000 年の名盤。彼の音楽はアストゥリアスの伝統的なスタイルの上にロックっぽい斬新な音作りや土俗的香りを放つ女性ヴォーカルの起用等、極めて独自色を発散している。1992 年にブルターニュの音楽祭でバグパイプ部門最優秀賞を受賞。
2000 作。EMI-Odeon。検品してお送りします)
*BRENGA ASTUR:Cancios Del Gochu Xabaz B
(魅惑の女性シンガー Marta Elola がヴォーカルのアストゥリアスの大型ケルティック・ロック・バンド"Brenga Astur"のおそらく唯一のアルバム。1999 作。Fonofolk)
*DUERNA:A Mansalva B
("Prau Escenariu"という国際フォーク・ニュージック・コンテストで優勝のアストゥリアスの 6 人組ケルティック・バンド。彼らが目指す音楽は独自性の強いケルト音楽。Estefania の大地揺るがすパワフルなシンギングとガイタをフィーチャーしたケルティック・サウンドは凄い。2011 作。Folka)

[CD/ＧＡＬＩＣＩＡ]
*MILLADOIRO:Galicia No Tempo(90 作。Discmedi Blau) B
*MILLADOIRO:3(92 作。CBS) B
*MILLADOIRO:Solfafria(ｹﾞｽﾄ:Paddy Moloney。92 作。CBS) B
*MILLADOIRO:Unha Estrela Por Guia(2006 作。Discmedi Blau)B
*CHOUTEIRA:Folla De Lata B
(ガリシアの歌姫 Uxia をヴォーカルに据えた異色のガリシアン・ト

ラッド･バンドの Chouteira の 2000 年の三枚目。ガイタやパンデレイタやアコなどの楽器に、サックスやチューバやトランペットなどの管楽器が加わったサウンドは、ケルティックなガリシアン･トラッドに耳慣れたファンには目新しく響くが、南欧～地中海の民俗音楽的な響きで、むしろ土俗性を増しているようにも感じられる。Uxia の孤高のシンギングも絶品。2000 作。Boa)

[CD/ＨＵＮＧＡＲＹ]

(Agi Herczku & A Banda)

*AGI HERCZKU ES A BANDA:Kamara C
(Makam の Bognar Szilvia と Szaloki Agi の両歌姫とトリオでアルバムを制作したことのあるハンガリーを代表する歌姫の Herczku Agnes{Agi Herczku}とバンドによる新作。かれこれ 20 年の音楽パートナーでマルチ演奏家の Nikola Parov{Andy Irvine & Davy Spillane の"EastWind"や Riverdance にも参加}率いるバンドを配して制作された本作は、カルパチア盆地とバルカン半島の民謡をハンガリーのフォーク･ミュージックを中心に広く汎東欧的スケールのメロディーで、Agi の、特に抒情的なシンギングの魅力が生える東欧風トラッド･アルバムとして結実。ヴァイオリンを中心に各種民族楽器を駆使し、温和な和音に重きを置いたという音楽は、カラフルな東欧風サウンドを最高レベルで気高く創作していて、耳に新鮮。ハンガリー～東欧産トラッドの近年のベスト。ゲスト:Bognár Szilvia。2019 作。Fono)

*LAKATOS ROBERT ES A REV:Hajnalodik B
(ハンガリーの著名なフィドル奏者の L.Robert と彼のグループによるクラシックと伝統音楽を融合を試みた意欲作。ヴォーカルは L.Robert の奥様の Korpas Eva。2005 作。FolkEuropa。検品してお送りします)

*KORPAS EVA:Szerelem,Szerelem B
(英題"Love,Love"。Primas Parade,Tukros Band,Lakatos Robert などのアルバムで魅惑的なヴォーカルを披露している女性シンガーの Eva のソロ。本作は Eva のエキゾティックで不思議な安らぎ感があるジャズ風味のハンガリアン･トラッド。Muzsikas 系でも Makam 系でもな新感覚の魅惑のハンガリアン･トラッド。全 18 曲。2010 作。FolkEuropa。検品してお送りします))

*KALLOS ARCHIVUM:Uran,Irgalmazz Nekunk(2005 作。Fono) C

[CD/ＢＵＬＧＡＲＩＡ]

*BELONOGA:Through The Eyes Of The Earth B
(ブルガリア国立放送合唱団"Mystery of the Bulgarian Voices"出身の女性シンガーの Gergana Dimitrova-Belonoga のソロ。ブルガリア屈指のカヴァル奏者の Kostadin Genchev や Philip Koutev Ensemble のガドゥルカ奏者の Peter Milanov 他ブルガリア屈指の

民族楽器の演奏家等にジャズ･トランペッターの Rossen Zahariev-Roko を加えたバンドの音楽は、ブルガリアの民族音楽の土俗的なサウンドを果敢に体現していて圧巻だし、Belonoga のブルガリアン･ヴォイス的に磨き抜かれたヴォーカルはマジカルで絶品。2019 作。CPL-Music)

[CD/KLEZMER,GYPSY,BALKAN 他]

(Besh O Drom)

*BESH O DROM:20 D

(Besh o droM は魅惑の女性シンガー、Kaszai Lili がヴォーカルのハンガリーの大型バルカン音楽バンド。本なら A５判のハードカバー CD。表紙を開くと、Gabor Kardos' というコンサートでの写真集。写真からもライヴの熱気と白熱さが伝わってくるが、カヴァル、ツィンバロム、クラリネット、サックス、アコ、パーカッションにエレキギター、エレキベース、ドラムスによる音楽は、バルカン･スタイルのフォーク･ロックで、Kaszai Lili のヴォーカルを含めバルカン音楽の民族音楽性を濃厚に保持しながら、熱くロックする。バルカン音楽ファンならずとも血が騒ぐこと必至。滅茶苦茶凄い。2020 作。Fono)

*LENA ROTHSTEIN:Cantos Judeo-Espanoles B

(国際アンサンブル"Spharadim"の創設者でウィーンのユダヤ人シンガーの Lena Rothstein のセファルディ{スファラディ}･アルバム。心地よく中世スペインに誘われる気分。1991 作。Extraplatte)

*OLD SALT:Up River Overseas A

(Old Salt は米国人一名、スコットランド人一名、ベルギー人三名、スウェーデン人一名で二姫四太郎の六人組。核になる音楽は米国人シンガーでバンジョーとフィドル担当の Dan Wall の音楽性、それはアパラチアン音楽とオールドタイム･ミュージック。Dan Wall 自身がその系統のシンガーとして、ミュージシャンとして秀でた才能の持ち主で、他国の音楽仲間の手を借りて、その系統の音楽の最前線のハイブリッドな音楽を創作していて、お見事。ヨーロッパの古風なジプシー音楽のサウンドもご披露。2016 作。Appel)

*GIRO:Galway International Retro Orchestra B

(アイルランドのゴールウェイで結成された一姫三太郎の四人組。彼らが目指す音楽は 20 世紀はじめ頃の雰囲気の音楽。アイリッシュもジプシーもクレズマーも北欧も「20 世紀はじめ頃の雰囲気」をそれ風のレトロなサウンドで創作していて、ユニークだし、全体を通して、音楽に人情味が感じられて、心はずっと笑顔。2014 作。GIRO)

*ALEXANDER FEDORIOUK:The Art Of The Cimbalom A

(2003 作。Traditional Crossroads。検品してお送りします)

*THE BEST OF ISRAEL B

(副題"Tous Les Succes Des Plus Grands Artistes"。発売年不明。Atoll。検品してお送りします)
*EDUARDO PANIAGUA:Tres Culturas C
(英題"Three Cultures"。ユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒が共有する中世スペインの叙事詩のハルチャと子守唄の再現。1998 作。Pneuma。検品してお送りします)
*URBAN TUNELLS KLEZMERBAND:In Der Fintster B
(ノルウェーの男性五人組クレズマー・バンド。ジャズやロックやタンゴ等をも取り込んだ独創的なクレズマー音楽。面白い。2011 作。Curling Legs)

[CD/ＧＵＩＮＥＡ]
*DJELI MOUSSA CONDE:Womama A
(グリオでコラ奏者でシンガーの Djeli Moussa Condéの二枚目。本作はネルソン・マンデラに捧げられたアルバム。アフリカ音楽からラテン音楽までの幅で、カラフルでトロピカルでジャンプカあるワールド・ミュージック。2015 作。Buda Musique)

[CD/ＨＡＷＡＩＩ]
*クラシック・バイ・ソル・ホオビイ ¥2800
(ハワイ音楽の歴史にサンゼンと輝く永遠の巨匠、ソル・ホオピイ。スティール。ギターをもっとも美しく味わい深く弾きこなした至高の名手その知られざる名演を網羅し、15 曲が初復刻今年のハワイ音楽は、これでキマリだ！{CD 裏ジャケの解説より}。監修:中村とうよう。1993 作。オーディブック)

[CD/WORLD NETWORK シリーズ] 各¥1500
*PORTUGAL(11)
("Guitarra Portuguesa"。Pedro Caldeira Cabral-Variacoes。1992 作。Network Medien。検品してお送りします)
*MADAGASCAR(18)
("Music Of Madagascar"。Rossy,Tselonina,Mahaleo,Matrimbala,Justin Vali & Lolo Sy Ny Triny。1993 作。Network Medien。検品してお送りします)
*SPAIN(25)
("Cante Flamenco En Vivo"。Carmen Linares-Desde El Alma。1994 作。Network Medien。検品してお送りします)
*CORSICA/SARDINIA(31)
("The Mystery Of Poliphony"。Canta U Populu Corsu & A Filetta,Donnisulana,Tenores Di Bitti,Coro Di Neoneli,Coro Di Orune,Coro Di Mamoiada,Luigi Lai。1995 作。Network Medien。検品してお送りします)
---
*Fay Hield の新作の発売前にネットで聴けるオーディオ・サンプル２曲を視聴して、おおお！これは CD でちゃんと聴いて売らねばと思い、本 CD の到着を首を長くして待っていました。Fay から送られてきた追跡番号を検索したら、9/13 配達予定。最後にコメントを入れられて、ほっとしています。本 CD を待っている間に Dan Penn 翁の新作も入荷。改めて今回の新入荷分を見ると、今回もベストアルバム候補クラスの CD が何枚も。

*Chris Leslie の新作のレーベルマークがきじとら猫の写真だったので、Chris にわが家の猫の写真を添付して、「にゃんこ好き？」と尋ねたら、「イエス！CD のレーベルのうちの猫のポーズ{Paws}の写真を見たからそう思ったんだろうね。ポーズは数年前に亡くなったんだ。レーベル名のポーズは彼に因んで付けたんだ。ポーズがいなくて今も寂しい。ぼくがライヴで家を出るときはぼくの顔をじっと見ていたもんだ。そして深夜帰宅すると迎えに出てきて、ぼくにスリスリしてぼくから離れなかったんだ」と。(^▽^)猫を飼ってる方、猫の様子が目に浮かびますよね。
*お盆前、妻の実家の墓掃除に行ったとき、昔仕事場にしていた部屋の片隅にある段ボール箱を開けたら、友人の星川京児君(故人)が企画して、選盤と解説書適任者選びを手伝ったキングレコードのヨーロピアン･トラディショナル･コレクション･シリーズのサンプル CD がごっそり出てきました。おお懐かしい！僕も数枚解説しています。発売されたのは 1989 年。やりたいことだらけの時代でした。
*そのシリーズのプロモーション用に制作されたヨーロピアン･トラディショナル･コレクション･ダイジェストが数枚出てきました。シリーズで発売された CD の中から 13 曲が収録されています。解説は星川君で、トラッド･ファンとは目線の違う解説です。非売品ですが、1890 円＋税にてご注文をお受けします。ヨーロピアン･トラディショナル･コレクション･ダイジェスト(CD)とお申し出下さい。
*間もなく連休があるんですね。福岡に住む姪から「今度の四連休に Go To トラベルで娘と湯布院に行くから、遊びに行っていい？」と電話があって、四連休のことを知りました。それぞれの連休を、そしてようやくやってきた秋(家の前の樫の木はドングリの実を付け、栗の木から栗が落ち始めました)をコロナに注意してお過し下さい。
*今年は通販カタログの発行は次回が最後になりそうですね。ではご注文をお待ちしています。(船津)

(ヨーロピアン･トラディショナル･コレクション･シリーズの CD)

シリーズの一枚、南仏のロジーナとマルティナの「ナダル・エンカラ」だけ抜けていて、後日思い当たる場所(保存用 CD 棚)を探したら、見つかりました。上の写真は「ナダル・エンカラ」抜きの写真です。